

# 有価証券報告書

事業年度 自 2018年4月1日  
(第46期) 至 2019年3月31日

株式会社クロスキャット

---

# 有価証券報告書

---

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

# 目 次

頁

## 第46期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	5
3 【事業の内容】	7
4 【関係会社の状況】	8
5 【従業員の状況】	8
第2 【事業の状況】	9
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	9
2 【事業等のリスク】	11
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	13
4 【経営上の重要な契約等】	15
5 【研究開発活動】	15
第3 【設備の状況】	16
1 【設備投資等の概要】	16
2 【主要な設備の状況】	16
3 【設備の新設、除却等の計画】	16
第4 【提出会社の状況】	17
1 【株式等の状況】	17
2 【自己株式の取得等の状況】	20
3 【配当政策】	21
4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	21
第5 【経理の状況】	34
1 【連結財務諸表等】	35
2 【財務諸表等】	61
第6 【提出会社の株式事務の概要】	73
第7 【提出会社の参考情報】	74
1 【提出会社の親会社等の情報】	74
2 【その他の参考情報】	74
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	75

## 監査報告書

## 内部統制報告書

## 確認書

**【表紙】**

**【提出書類】** 有価証券報告書

**【根拠条文】** 金融商品取引法第24条第1項

**【提出先】** 関東財務局長

**【提出日】** 2019年6月26日

**【事業年度】** 第46期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

**【会社名】** 株式会社クロスキャット

**【英訳名】** CROSS CAT CO., LTD.

**【代表者の役職氏名】** 代表取締役社長 井上 貴功

**【本店の所在の場所】** 東京都港区港南一丁目2番70号

**【電話番号】** 03（3474）5251

**【事務連絡者氏名】** 執行役員経営財務統括部長 吉野 貴之

**【最寄りの連絡場所】** 東京都港区港南一丁目2番70号

**【電話番号】** 03（3474）5251

**【事務連絡者氏名】** 執行役員経営財務統括部長 吉野 貴之

**【縦覧に供する場所】** 株式会社東京証券取引所  
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

## 第一部 【企業情報】

### 第1 【企業の概況】

#### 1 【主要な経営指標等の推移】

##### (1) 連結経営指標等

回次	第42期	第43期	第44期	第45期	第46期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (千円)	—	9,396,638	10,153,176	9,713,448	9,769,549
経常利益 (千円)	—	537,582	576,098	739,659	744,976
親会社株主に帰属する 当期純利益 (千円)	—	352,852	417,903	473,604	535,824
包括利益 (千円)	—	274,287	588,360	588,315	675,109
純資産額 (千円)	—	2,353,672	2,841,203	3,188,681	3,716,113
総資産額 (千円)	—	4,748,414	5,033,771	5,497,563	5,816,636
1株当たり純資産額 (円)	—	280.12	338.14	388.75	453.05
1株当たり当期純利益 (円)	—	41.35	49.74	57.54	65.32
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	—	49.6	56.4	58.0	63.9
自己資本利益率 (%)	—	15.0	16.1	15.7	15.5
株価収益率 (倍)	—	11.85	10.66	16.58	15.89
営業活動による キャッシュ・フロー (千円)	—	211,940	564,750	669,059	92,237
投資活動による キャッシュ・フロー (千円)	—	△919,616	△31,985	584	△22,472
財務活動による キャッシュ・フロー (千円)	—	198,740	△200,829	△340,836	△247,677
現金及び現金同等物 の期末残高 (千円)	—	580,064	912,000	1,240,807	1,062,894
従業員数 (ほか、平均臨時 雇用者数) (名)	— (—)	595 (79)	600 (79)	606 (67)	602 (64)

- (注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。  
2. 第43期より連結財務諸表を作成しているため、第42期の連結経営指標等は記載しておりません。  
3. 第43期から第46期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。  
4. 第43期の自己資本利益率については、期末の自己資本に基づいて算定しております。  
5. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第46期の期首から適用しており、第45期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

## (2) 提出会社の経営指標等

回次		第42期	第43期	第44期	第45期	第46期
決算年月		2015年 3月	2016年 3月	2017年 3月	2018年 3月	2019年 3月
売上高	(千円)	8,174,524	8,518,310	8,823,346	8,402,506	8,530,086
経常利益	(千円)	533,901	512,067	483,645	614,582	643,829
当期純利益	(千円)	300,056	328,100	321,447	405,577	483,966
持分法を適用した場合の投資利益	(千円)	—	—	—	—	—
資本金	(千円)	459,237	459,237	459,237	459,237	459,237
発行済株式総数	(株)	9,210,960	9,210,960	9,210,960	9,210,960	9,210,960
純資産額	(千円)	2,251,727	2,360,039	2,716,433	2,975,655	3,460,904
総資産額	(千円)	3,916,696	4,543,487	4,705,615	5,073,595	5,359,948
1株当たり純資産額	(円)	261.30	280.87	323.29	362.78	421.94
1株当たり配当額 (うち1株当たり 中間配当額)	(円)	12.00 (—)	12.00 (—)	15.00 (—)	18.0 (—)	20.0 (—)
1株当たり当期純利益	(円)	34.82	38.45	38.26	49.27	59.00
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	(円)	—	—	—	—	—
自己資本比率	(%)	57.5	51.9	57.7	58.6	64.6
自己資本利益率	(%)	14.1	14.2	12.7	14.3	15.0
株価収益率	(倍)	15.14	12.74	13.85	19.36	17.59
配当性向	(%)	34.5	31.2	39.2	36.5	33.9
営業活動による キャッシュ・フロー	(千円)	420,849	—	—	—	—
投資活動による キャッシュ・フロー	(千円)	△27,619	—	—	—	—
財務活動による キャッシュ・フロー	(千円)	△136,174	—	—	—	—
現金及び現金同等物 の期末残高	(千円)	1,089,000	—	—	—	—
従業員数 (ほか、平均臨時 雇用者数)	(名)	531 (91)	530 (79)	529 (78)	529 (66)	522 (63)
株主総利回り (比較指標：配当込み TOPIX)	(%)	157.6 (130.7)	150.3 (116.5)	166.4 (133.7)	295.6 (154.9)	326.0 (147.1)
最高株価	(円)	670	620	795	1,449	1,740
最低株価	(円)	318	395	419	496	791

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2. 持分法を適用した場合の投資利益については、第42期については持分法を適用すべき関連会社がないため記載しておりません。また、第43期から第46期については、連結財務諸表を作成しているため記載しておりません。

3. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

4. 第43期より連結財務諸表を作成しているため、営業活動によるキャッシュ・フロー、投資活動によるキャッシュ・フロー、財務活動によるキャッシュ・フロー及び現金及び現金同等物の期末残高は記載しておりません。

5. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）等を第46期の期首から適用しており、第45期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指

標等となっております。

6. 最高株価及び最低株価は、2018年12月13日以降は東京証券取引所市場第一部におけるものであり、2018年6月11日から2018年12月12日までは同取引所市場第二部、2018年6月10日以前は同取引所 J A S D A Q（スタンダード）におけるものであります。
7. 第46期の1株当たり配当額20円には、東京証券取引所市場第一部への指定記念配当2円を含んでおります。

## 2 【沿革】

年月	事項
1973年6月	産業制御系ソフト開発を目的として資本金100万円をもって東京都大田区蒲田に株式会社ニスコ ンコアを設立
1977年10月	株式会社イーディーピー・アプリケーションシステムに社名変更するとともに本社を東京都中央 区日本橋小網町に移転
1979年1月	本社を東京都港区麻布台に移転
1981年10月	倉庫管理パッケージ(RAPAC)販売開始
1984年4月	自動倉庫管理パッケージ(AUTO-RAPAC)販売開始 大型コンピュータ・システム(金融機関向)の受注開始
1985年9月	本社を東京都港区南麻布に移転
1986年11月	特定労働者派遣事業の届出
1989年6月	株式会社クロスキャットに社名変更、システムインテグレーションサービス事業開始
1990年2月	通産省(現・経済産業省)システムインテグレータ登録企業となる
1990年10月	株式会社イーディーピー・サービスと合併 OAサービス事業部新設
1991年11月	自社開発パッケージソフト「STOCKER」(倉庫管理システム)販売開始 仙台事業所を開設
1994年6月	自社開発パッケージソフト「STOCKER/WIN」(倉庫管理システム)販売開始
1997年3月	本社を東京都品川区東品川に移転
1997年4月	仙台事業所を仙台支店に名称変更
1997年7月	釣り専門サイト「つりnet」サービス開始
1998年4月	ITコンサルティングビジネス開始
1999年8月	ISO9001認証取得
2001年3月	パッケージソフト「同報@メール」販売開始
2001年6月	北品川事業所開設 スタッフサービス事業部を移転
2001年11月	一般労働者派遣事業の認定を取得
2002年1月	プライバシーマーク付与認定企業となる
2002年6月	日本証券業協会に店頭登録
2002年11月	パッケージソフト「共有@メール」販売開始
2003年11月	仙台支店を宮城県仙台市青葉区(同区内)に移転
2004年2月	ISMS(情報セキュリティマネジメントシステム)認証取得 BS7799認証取得 BIツール販売開始
2004年12月	日本証券業協会への店頭登録を取消し、ジャスダック証券取引所に上場
2005年1月	CCBITemplate販売開始
2005年11月	有料職業紹介事業の認定取得
2006年3月	「つりnet」サービスを営業譲渡
2006年7月	株式会社クロススタッフ設立
2007年2月	ISO27001認証取得(I SMSからの移行)
2010年4月	ジャスダック証券取引所と大阪証券取引所の合併に伴い、大阪証券取引所JASDAQに上場
2011年2月	株式会社クロススタッフを清算
2011年6月	仙台支店を宮城県仙台市青葉区(同区内)に移転
2011年10月	クレジット国際ブランドソリューション「CC-Quattro」販売開始
2011年11月	予算管理ソリューション「CC-BudgetRunner」販売開始 SaaS型勤怠管理システム「CC-BizMate」販売開始

年月	事項
2013年7月	市場統合により東京証券取引所 J A S D A Q (スタンダード) に上場
2014年1月	予算管理クラウドサービス「CC-BudgetRunner Lite」販売開始
2014年3月	CMMI レベル3 達成
2015年6月	ユニチカ情報システム株式会社 (現・株式会社クロスユーアイエス) を連結子会社化
2016年2月	本社を東京都港区港南に移転
2017年3月	CMMI レベル5 達成 (公共ビジネス事業部公共第1部)
2018年6月	東京証券取引所第二部へ市場変更
2018年12月	東京証券取引所第一部へ指定替え

### 3 【事業の内容】

当社グループ（当社及び当社の関係会社）は、当社及び連結子会社1社（株式会社クロスユーアイエス）によって構成されております。

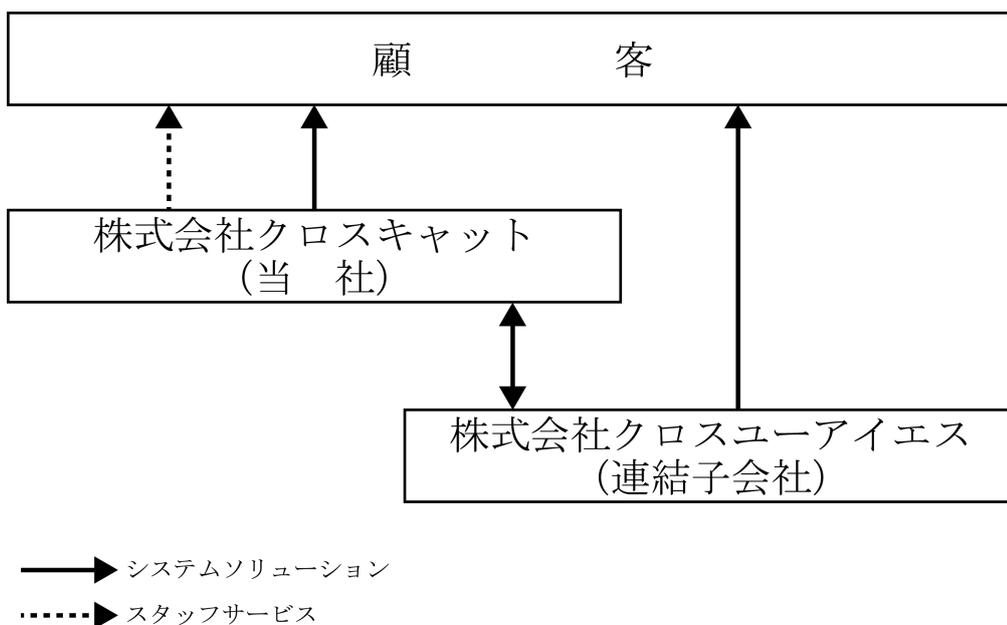
当社グループの事業内容は、情報サービス事業並びにこれらの付帯業務の単一事業であり、セグメント別の記載を省略しておりますが、事業内容と位置づけは次のとおりであります。システムソリューションの開発におきましては、当社から株式会社クロスユーアイエスに開発業務の一部を委託しております。

区 分		主要な事業内容	会社名
システム ソリューション	システム開発	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ソフトウェア開発</li> <li>○ システム運用、保守</li> <li>○ テクニカルサポート</li> <li>○ システムコンサルティング</li> <li>○ インフラサポート</li> </ul>	当社 株式会社クロスユーアイエス
	B I ビジネス	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ B I 導入コンサルティング</li> <li>○ B I 開発、実装支援</li> <li>○ B I /D B 高速化</li> <li>○ B I 教育</li> </ul>	当社 株式会社クロスユーアイエス
	そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ オリジナルソリューション販売</li> <li>○ オリジナルパッケージ販売</li> <li>○ ソフトウェアプロダクト販売</li> <li>○ ハードウェア機器販売</li> <li>○ ハードウェア保守管理</li> <li>○ I Tに関する教育</li> </ul>	当社 株式会社クロスユーアイエス
スタッフサービス		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 技術系派遣</li> <li>○ 事務系派遣</li> <li>○ アウトソーシング</li> <li>○ 職業紹介</li> </ul>	当社

（注） B I はBusiness Intelligenceの略であり、企業にとって経営情報を可視化・分析することで経営の革新や効率化を実現させるための情報活用を指します。当社では、最適なBI活用を可能とする導入コンサルティングから開発、実装支援を行っております。

[事業系統図]

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



#### 4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金 (千円)	主要な事業 の内容	議決権の所有 (又は被所有) 割合(%)	関係内容
(連結子会社) 株式会社 クロスユーアイエス	大阪府大阪市 中央区	100,000	情報処理サー ビス及びシス テム開発	100.0	役員の兼任 資金の貸付 ソフトウェア開発業務の委託

- (注) 1. 有価証券届出書または有価証券報告書の提出会社ではありません。  
 2. 特定子会社ではありません。  
 3. 上記子会社の売上高（連結会社相互間の内部売上高を除く）の連結売上高に占める割合が10%を超えております。
- 主要な損益情報等
- |         |             |
|---------|-------------|
| ① 売上高   | 1,239,463千円 |
| ② 経常利益  | 134,676千円   |
| ③ 当期純利益 | 85,387千円    |
| ④ 純資産額  | 382,115千円   |
| ⑤ 総資産額  | 606,391千円   |

#### 5 【従業員の状況】

##### (1) 連結会社の状況

2019年3月31日現在

従業員数(人)
602(64)

- (注) 1. 当社グループは、情報サービス事業並びにこれらの付帯業務の単一事業であるため、セグメント別の従業員数を記載しておりません。  
 2. 従業員数は、就業人員数であり、臨時雇用者数は、年間の平均人員を( )内に外数で記載しております。

##### (2) 提出会社の状況

2019年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢	平均勤続年数	平均年間給与(円)
522(63)	38歳 11ヶ月	12年 9ヶ月	5,249,575

- (注) 1. 従業員数は、就業人員数であり、臨時雇用者数は、年間の平均人員を( )内に外数で記載しております。  
 2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金の手当を含んでおります。

##### (3) 労働組合の状況

当社には、労働組合は組織されておりませんが、労使関係は円満に推移しております。

連結子会社である株式会社クロスユーアイエスは、ユニチカ労働組合本社支部に加盟しております。

## 第2 【事業の状況】

### 1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

#### (1) 会社の経営の基本方針

当社は、創業以来「知識・技術・創意」という知的要素である「技」を高め、お客様には「誠意」—どんな困難な局面においても意欲・忍耐・信念を失わない「心」—で対応する「心技の融和」を経営理念とし社会に貢献する企業を目指して、企業経営を推進しております。

当社は、先進的なアプリケーション開発技術と、多様な運用ノウハウを駆使し、顧客への総合的かつプロフェッショナルなサービスの提供に努めます。そして、常に時代を見る眼と、みずみずしい感性を持ち、世のトレンド、環境にフレキシブルな対応ができるよう新技術の獲得には他社より一歩先んじて取り組んでおります。

また、透明で公正な経営を心がけ、事業力の強化、収益力の向上、財務体質の改善強化を図り、発展すべく企業努力を重ねて参ります。

#### (2) 目標とする経営指標

当社グループでは、顧客の視点に立った経営を基本に品質と生産性の向上により顧客満足度を高めると共に、収益性及び資本効率性を重視した経営の効率化を進め企業価値の向上と事業の拡大を目指しております。

#### (3) 中長期的な会社の経営戦略

当社グループは、2018年4月より新中期経営計画「Collaboration Hub 2020」を策定し、事業環境変化への素早い対応により、当社グループがHub（中心軸）となって様々なステークホルダーと連携し、付加価値協創企業を目指していくこととしております。

##### ① 成長エンジンの強化

当社の得意分野の推進とともに積極投資による新サービスの創出を実施いたします。また、今後もより一層の成長・拡大を目指し事業提携やシナジーを重視したM&Aを積極的に推進して参ります。

##### ② 営業の変革

顧客志向マーケティングにより顧客の抱える潜在ニーズを把握し、競争優位性を持った提案力を強化することで、顧客に対して適切な提言ができるパートナーとしての信頼関係を構築して参ります。

##### ③ 開発プロセスの変革

現在、ソフトウェアプロセスの成熟度を示すCMMI (Capability Maturity Model Integration)のレベル3を全社で達成しております。更に、公共ビジネス事業部公共第1部では2017年3月にレベル5を達成しており、より一層の品質向上のためにCMMIのレベル5達成部門の拡大を目指し、標準プロセス管理の強化を実施して参ります。

##### ④ 人材育成

顧客に高付加価値サービスを提供するため、高度な専門人材の育成に注力するとともに、マネージメント強化を図るための研修を実施しPMP資格取得者の大幅増加を目指します。また、ダイバーシティを意識し、多様な人材をダイナミックに活用することにより、顧客の満足度と社員のモチベーションの向上を図ります。

##### ⑤ 経営基盤の強化

利益の最大化とともに当社のブランド価値の向上に努めます。また、子会社とのシナジー効果を高めることで当社グループの経営基盤の強化を目指します。

#### (4) 経営環境及び対処すべき課題

情報サービス産業を取り巻く事業環境は、情報化投資の重要性は認識されているものの、投資費用の抑制傾向により厳しい競争が続くことと判断しております。

このような状況の中、当社グループでは、顧客起点のITサービス企業を目指し、品質と生産性の向上により顧客満足度を高め、成長し続けていくため、以下の課題に取り組んで参ります。

##### ① 業容の拡大

IoT (Internet of Things) の発展で世の中のあらゆる事象のデータを取得し、取得したデータから新たな価値を創造できるビッグデータやAIは、社会に欠かせない技術となっており、経営やビジネスの競争優位の獲得に向けたIT投資の戦略性が高まっております。情報サービス業界では、企業のIT投資意欲は高いものの、当社グループが業容を拡大していくには、他社との競争において優位に立つ必要があります。そのために、ブロックチェーンやAI等の先端技術を活用できる開発体制の準備を進めております。また、子会社であるクロスユアイエスとのグループ経営のシナジー創出はもとより、事業提携やM&Aについても戦略的検討を継続して参ります。

##### ② 収益力の向上

収益力を向上させるためには、不採算プロジェクトを未然に防ぐことが重要な課題となります。新たな業務分野、新たな技術、初めてのお客様の仕事については、高いリスクを内包していることを前提に、長年運用実績のあるQMS (Quality Management System) とレベル3を達成した国際的なソフトウェア開発プロセスの能力成熟度モデルであるCMMIのノウハウを活かし、PMO (Project Management Office) 専任部署による監視強化と併せて高いレベルでの品質管理活動を実践しております。2017年3月には、公共ビジネス事業部公共第1部において標準プロセスが最適化されたCMMIレベル5を達成しました。今後は、レベル5達成の部門を拡大していくことで、更なる品質向上を目指すべく研鑽を積んで参ります。

##### ③ 人材の育成と確保

企業成長には優秀な人材の確保・育成は不可欠であり、お客様からも常に質の高いサービスを求められております。情報サービス企業にとって最も重要な経営資源である技術者の安定的確保とスキルの向上は、継続的な経営課題といえます。当社グループといたしましては、新卒採用、キャリア採用ともに力を入れる一方で、M&Aも選択肢とし、人材の確保に努めます。また、迎え入れた人材が戦力として活躍できるよう、最新技術習得とプロジェクトマネジメントスキルの習得を中心とした社内研修による人材育成に努めて参ります。加えて、重要なビジネスパートナーである協力会社との関係強化により、当社グループと協力会社が一体となって人材強化を実現できる関係を構築して参ります。

##### ④ 働き方改革推進

労働人口の減少に伴い一億総活躍社会が標榜される中、当社としても社員のワークライフバランスに配慮しつつ、生産性の向上を実現することが重要な課題であると認識しております。労働に対する価値観の変化や多様な就労条件に柔軟に対応できる制度を整備し続けること、社員の健康や意欲を損なわない環境を保ち続けることが、事業の健全な継続には不可欠であると考え、適切な働き方改革・休み方改革を推進して参ります。

## 2 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項として以下のようなものがあります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

### (1) 環境リスク

顧客のIT投資は経済情勢や景気動向の影響を受ける傾向にあり、日本経済が低迷または悪化した場合には、顧客のIT投資が減少するおそれがあり、その場合には当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

### (2) 主要取引先への依存リスク

主要取引先である大手メーカー系、インテグレーター系のお客様の発注方針が大きく変更された場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

### (3) 不採算プロジェクト発生のリスク

システム開発においては、工程毎に見積もりを行っており、QMSとCMMIによる品質管理やPMOによるプロジェクト監視に努めておりますが、予測できない要因により開発工程での品質問題や工期問題の発生及び、システムの運用段階になってから不具合等が発見される場合があります。このような状況により不採算プロジェクトが発生した場合は、業績に影響を及ぼす可能性があります。

### (4) 技術者確保のリスク

当社グループでは、人材の採用を積極的に行っており、社内教育による人材育成とビジネスパートナーである協力会社との連携により技術者の確保に努めておりますが、労働市場の流動化と技術革新の多様化により必要な技術者が確保できない場合、事業展開が制約され計画を達成できない可能性があります。

### (5) 情報セキュリティリスク

情報サービス企業として様々な情報資産を保有しており、ISMS（Information Security Management System）に則った情報管理・取扱と意識浸透の教育に努めておりますが、万一漏洩等の事故が発生した場合、社会的信用を低下させ、業績に影響を及ぼす可能性があります。

### (6) 法務リスク

当社グループでは、コンプライアンス教育を実施し、法令や社内規程等の遵守に努めておりますが、コンプライアンス上のリスクを完全に回避できない可能性があり、法令などに抵触する事態が発生した場合や、取引契約に関する問題が発生した場合、社会的信用の低下、顧客からの損害賠償請求等により業績に影響を及ぼす可能性があります。

### (7) 安全衛生管理リスク

当社グループでは、適正な労務管理に努めておりますが、システム開発プロジェクトにおいては、当初計画にない想定外の出来事が発生し、品質や納期を厳守するため長時間労働や過重労働が発生することがあります。当社グループでは、日頃より従業員の健康問題に繋がるこのような事象の発生を撲滅すべくプロジェクト監視しております。しかしながら、やむを得ない要因によりこのような事象が発生した場合には、システム開発での労働生産性の低下等により業績に影響を及ぼす可能性があります。

### (8) 技術革新に関するリスク

情報サービス業界では、大幅な技術環境の変化が生じることがあります。当社グループでは多様な技術動向の調査に努めておりますが、予想を超える技術革新への対応が遅れた場合、業績、財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(9) 価格競争に関するリスク

顧客のIT投資に対する要求はますます厳しさを増しており、価格面、品質面から常に同業他社との競争にさらされております。このような市場環境の中で、システム設計からマルチベンダー環境での開発、運用・保守までの全工程を単独で提供できる強みを活かし、より付加価値の高いサービスを提供することにより、単なるコストダウンのみの価格競争の影響を最小限にとどめるよう努めておりますが、見込みを超えた何らかの外的要因による価格低下圧力を受けた場合には、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(10) 企業買収におけるリスク

新しい法制度の整備や企業構造及び企業文化の変化等により、企業買収が活性化する中で当社グループが企業買収を実施または、被買収企業になる場合があります。企業買収の相手先や内容によっては、当社グループの社風や文化の差異の程度によってシナジーの創出に時間を要し、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(11) 不良債権リスク

当社グループは、社内規定に基づいて締結した顧客との契約をベースに売上債権を管理しております。また、顧客毎に与信管理を実施のうえ与信金額を設定し、債権の滞留および回収状況を定期的に把握し、貸倒引当金を計上しております。しかしながら、経済情勢の変化により経営基盤の脆弱な企業などにおいて、急速に経営状況が悪化するなど予測不能な事態が生じた場合には、売上債権の回収に支障をきたし、業績に影響を及ぼす可能性があります。

### 3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要並びに経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

#### (1) 経営成績

当連結会計年度の経営成績は、売上高9,769百万円（前年同期比0.6%増）、営業利益715百万円（前年同期比1.6%増）、経常利益744百万円（前年同期比0.7%増）、親会社株主に帰属する当期純利益535百万円（前年同期比13.1%増）と増収増益となりました。

経営指標の進捗につきましては、収益性指標である売上高経常利益率は前年同期と同じ7.6%となり、売上高当期純利益率は前年同期から0.6ポイント上昇し5.5%となりました。また資本効率性指標であるROE（自己資本利益率）については前年同期と比べ0.2ポイント減少したものの15.5%と高水準を維持しております。

生産、受注及び販売の実績は、次のとおりであります。

当社グループは、情報サービス事業並びにこれらの付帯事業の単一事業であり、開示対象となるセグメントはありません。

#### ① 生産実績

当連結会計年度の実績は、次のとおりであります。

当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
金額 (千円)	前年同期比 (%)
7,604,874	△0.1

- (注) 1. 上記の金額は当連結会計年度における総製造費用によっております。  
2. 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

#### ② 受注実績

当連結会計年度の受注状況は、次のとおりであります。

当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)			
受注高 (千円)	前年同期比 (%)	受注残高 (千円)	前年同期比 (%)
9,834,191	4.5	4,489,297	1.5

- (注) 1. 上記の金額は当連結会計年度における販売価格によっております。  
2. 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

### ③ 販売実績

当連結会計年度の販売実績は、次のとおりであります。

当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
金額 (千円)	前年同期比 (%)
9,769,549	0.6

(注) 1. 主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
	金額 (千円)	割合 (%)	金額 (千円)	割合 (%)
富士通株式会社	1,609,578	16.6	1,743,609	17.8
株式会社エヌ・ティ・ティ・データ	942,248	9.7	1,297,271	13.3
日本アイ・ビー・エム株式会社	888,859	9.2	1,008,077	10.3

2. 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

### (2) 財政状態

総資産は、前連結会計年度末に比べ319百万円増加し5,816百万円となりました。

これは主に、のれんの償却等による無形固定資産が41百万円減少したものの、所有する株式の時価評価等による投資その他の資産が116百万円増加したこと並びに売掛金の増加等により流動資産が284百万円増加したことによるものであります。

負債合計は、前連結会計年度末に比べて208百万円減少し2,100百万円となりました。

これは主に、借入金の返済により短期借入金が100百万円減少、未払法人税等の減少50百万円並びに買掛金の減少43百万円によるものであります。

純資産は、前連結会計年度に比べて527百万円増加し3,716百万円となりました。

これは主に、親会社株主に帰属する当期純利益の計上による増加535百万円、所有する株式の時価評価によるその他有価証券評価差額金の増加148百万円、剰余金の配当による減少147百万円によるものであります。

この結果、自己資本比率は前連結会計年度末の58.0%から5.9ポイント上昇し63.9%となりました。

### (3) キャッシュ・フロー

当連結会計年度における現金及び現金同等物(以下「資金」という)は、1,062百万円となりました。

主な資金需要は、売上原価の主な構成要素でありますソフトウェア開発に伴う人件費及び外注費、その開発を支えるパソコンやソフトウェア等の設備投資資金、有利子負債の返済及び利息の支払い等があります。

当連結会計年度においては、営業活動により資金が増加したものの、投資活動及び財務活動において、配当金や短期借入金の返済で資金を使用し資金が減少したため、当期末残高が177百万円減少しております。

なお、安定的な運転資金の調達方法として、金融機関との間で当座貸越契約を締結しており、当連結会計年度末における当該契約の借入未実行残高は1,900百万円となっております。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

#### (営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果得られた資金は、92百万円(前年同期比 86.2%減)となりました。これは主に、税引前当期純利益 816百万円、減価償却費 75百万円、のれん償却額 33百万円等による資金の増加があったことに対し、売上債権の増加 453百万円、仕入債務の減少 43百万円、法人税等の支払額 316百万円等による資金の減少があったことによるものであります。

#### (投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は、22百万円(前年同期は 得られた資金 0百万円)となりました。これは主に、投資有価証券の売却による収入 15百万円の資金の増加があったことに対し、設備等の有形固定資産の取得による支出 12百万円、ソフトウェア等の無形固定資産の取得による支出 25百万円等があったことによるものであります。

す。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果使用した資金は、247百万円(前年同期比 27.3%減)となりました。これは、短期借入金の返済による支出 100百万円、配当金の支払額 147百万円等があったことによるものであります。

#### 4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

#### 5 【研究開発活動】

当連結会計年度における研究開発費は、11百万円となっております。

主な活動は、以下のとおりであります。

- ・ 当社の勤怠管理ソリューション「CC-BizMate」の販売力強化に向けた研究開発
- ・ ブロックチェーン技術の活用及びA I 技術の活用に関する研究

### 第3 【設備の状況】

#### 1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度の設備投資の総額は32百万円で、その主たるものは、コンピュータ関連設備等に係る費用であります。

#### 2 【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、次のとおりであります。

##### (1) 提出会社

2019年3月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額 (単位: 千円)				従業員数 (人)
		建物及び 構築物	工具、器具 及び備品	その他	合計	
本 社 (東京都港区)	事業用社屋	140,868	39,617	0	180,486	418
仙 台 支 店 (仙台市青葉区)	事業用社屋	12,601	4,238	377	17,217	104

- (注) 1. 金額には消費税等は含まれておりません。  
2. 帳簿価額のうち「その他」は「車両運搬具」であります。  
3. 本社及び仙台の建物は賃借中のものであり、帳簿価額は建物及び建物附属設備と資産除去債務に対応する資産の未償却残高を記載しております。  
4. 当社グループは、情報サービス事業並びにこれらの付帯業務の単一事業であり、開示対象となるセグメントがないためセグメント別の記載を省略しております。

##### (2) 国内子会社

2019年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	設備の 内容	帳簿価額 (単位: 千円)				従業員数 (人)
			建物及び 構築物	工具、器具 及び備品	その他	合計	
株式会社 クロスユーアイエス	本 社 (大阪市中央区)	事業用 社 屋	17,434	24,295	—	41,730	80

- (注) 1. 金額には消費税等は含まれておりません。  
2. 建物は賃借中のものであり、帳簿価額は建物附属設備と資産除去債務に対応する資産の未償却残高を記載しております。

#### 3 【設備の新設、除却等の計画】

該当事項はありません。

## 第4 【提出会社の状況】

### 1 【株式等の状況】

#### (1) 【株式の総数等】

##### ① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数 (株)
普通株式	35,800,000
計	35,800,000

##### ② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数 (株) (2019年3月31日)	提出日現在 発行数 (株) (2019年6月26日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	9,210,960	9,210,960	東京証券取引所 市場第一部	単元株式数 100株
計	9,210,960	9,210,960	—	—

(注) 当社は、2018年6月11日に東京証券取引所 JASDAQ (スタンダード) から同取引所市場第二部へ市場変更しております。また、2018年12月13日に同証券取引所市場第二部から同証券取引所市場第一部へ指定替えをしております。

#### (2) 【新株予約権等の状況】

##### ① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

##### ② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### ③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

#### (3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

#### (4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
2009年4月1日～ 2010年3月31日 (注)	46,000	9,210,960	4,140	459,237	4,094	61,191

(注) 新株予約権の権利行使 46,000株

発行価格 179円

資本組入額 90円

## (5) 【所有者別状況】

2019年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）							単元未満株式の状況（株）	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	16	28	29	22	5	4,094	4,194	143
所有株式数（単元）	—	6,903	1,215	4,750	479	6	78,744	92,097	1,260
所有株式数の割合（%）	—	7.49	1.32	5.16	0.52	0.01	85.50	100.00	—

(注) 1. 自己株式1,008,523株は、「個人その他」に10,085単元及び「単元未満株式の状況」に23株を含めて記載しております。

2. 「その他の法人」の中には、証券保管振替機構名義の株式が40単元含まれております。

## (6) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数（千株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（%）
クロスキャット社員持株会	東京都港区港南1-2-70	755	9.21
佐藤 順子	東京都多摩市	638	7.77
尾野 貴子	神奈川県川崎市麻生区	543	6.62
牛島 豊	東京都中央区	444	5.42
小野田 亜紀	東京都多摩市	362	4.41
磯田 晶子	神奈川県川崎市麻生区	275	3.35
大久保 尚子	神奈川県川崎市麻生区	275	3.35
田崎 冬子	石川県金沢市	270	3.29
並木 豊	埼玉県越谷市	267	3.25
明治安田生命保険相互会社 （常任代理人 資産管理サービス信託銀行株式会社）	東京都千代田区丸の内2-1-1 （東京都中央区晴海1-8-12 晴海アイランドトリトンスクエアオフィスタワーZ棟）	240	2.92
計	—	4,069	49.59

(注) 上記のほか、自己株式が1,008千株あります。

## (7) 【議決権の状況】

## ① 【発行済株式】

2019年3月31日現在

区 分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内 容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	普通株式 1,008,500	—	—
完全議決権株式 (その他)	普通株式 8,201,200	82,012	—
単元未満株式	普通株式 1,260	—	1 単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	9,210,960	—	—
総株主の議決権	—	82,012	—

(注) 1. 「完全議決権株式 (その他)」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が4,000株含まれております。また、「議決権の数」欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数40個が含まれております。

2. 「単元未満株式」の欄には、自己株式23株が含まれております。

## ② 【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合 (%)
株式会社クロスキャット	東京都港区港南 1 丁目 2 番 7 0 号	1,008,500	—	1,008,500	10.94
計	—	1,008,500	—	1,008,500	10.94

## 2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号に該当する普通株式の取得及び会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

### (1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

### (2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
取締役会(2019年5月23日)での決議状況 (取得日 2019年5月24日)	770,000	783,860,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	—	—
残存決議株式の総数及び価額の総額	—	—
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	—	—
当期間における取得自己株式	699,600	712,192,800
提出日現在の未行使割合(%)	9.1	9.1

### (3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(千円)
当事業年度における取得自己株式	29	33
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

### (4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (—)	—	—	—	—
保有自己株式数	1,008,523	—	1,708,123	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

### 3 【配当政策】

当社は、利益配分につきましては、将来の事業展開と経営体質の強化のために必要な内部留保を確保しつつ、株主に対する利益還元を継続して実施していくことを基本方針としております。

当社は、期末配当として年1回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。

なお、当社は定款において、毎年9月30日を基準日として中間配当を行うことができる旨を定めており、これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当は株主総会、中間配当は取締役会であります。

当連結会計年度の配当につきましては、18円の配当を予定しておりましたが、2019年2月15日付「配当予想の修正（記念配当）に関するお知らせ」のとおり、普通配当を18円とし、東京証券取引所市場第一部への指定記念配当2円を加え20円としております。

内部留保資金につきましては、今後予想される経営環境の変化に対応すべく、今まで以上にコスト競争力を高め、市場ニーズに応える技術・開発体制を強化するために有効に投資してまいりたいと考えております。

なお、当連結会計年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株あたり配当額（円）
2019年6月26日 定時株主総会決議	164	20

### 4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

#### (1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

##### ① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社のコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方は、企業価値の最大化を図るためには、全てのステークホルダーに対する経営の透明性と健全性の確保及びアカウンタビリティ（説明責任）の明確化並びにスピードある意思決定と事業遂行を実現することが重要であるとの認識により、コーポレート・ガバナンスの強化に努めております。

##### ② 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社は、意思決定の迅速化及び経営の透明性を確保するため、監査等委員会制度を採用しております。また、業務執行と監督の分離を図るため、執行役員制度を導入しております。取締役会から執行役員に対し、業務執行に関する大幅な権限委譲を行うことにより、迅速な意思決定に基づく業務遂行の実現に取り組むため、本体制を採用しております。

コーポレート・ガバナンス体制は、主たる機関として、取締役会、監査等委員会及び会計監査人を設置し、その補完機関として、経営会議やJ-SOX委員会等を設置しております。

取締役会は、監査等委員である社外取締役3名を含む9名の取締役で構成されます。原則として毎月1回の定例取締役会を開催するほか、必要に応じて臨時取締役会を開催しております。取締役会は、法令・定款に定められた事項のほか、取締役会規程に基づき重要事項を決議し、各取締役の業務執行の状況を監督しております。

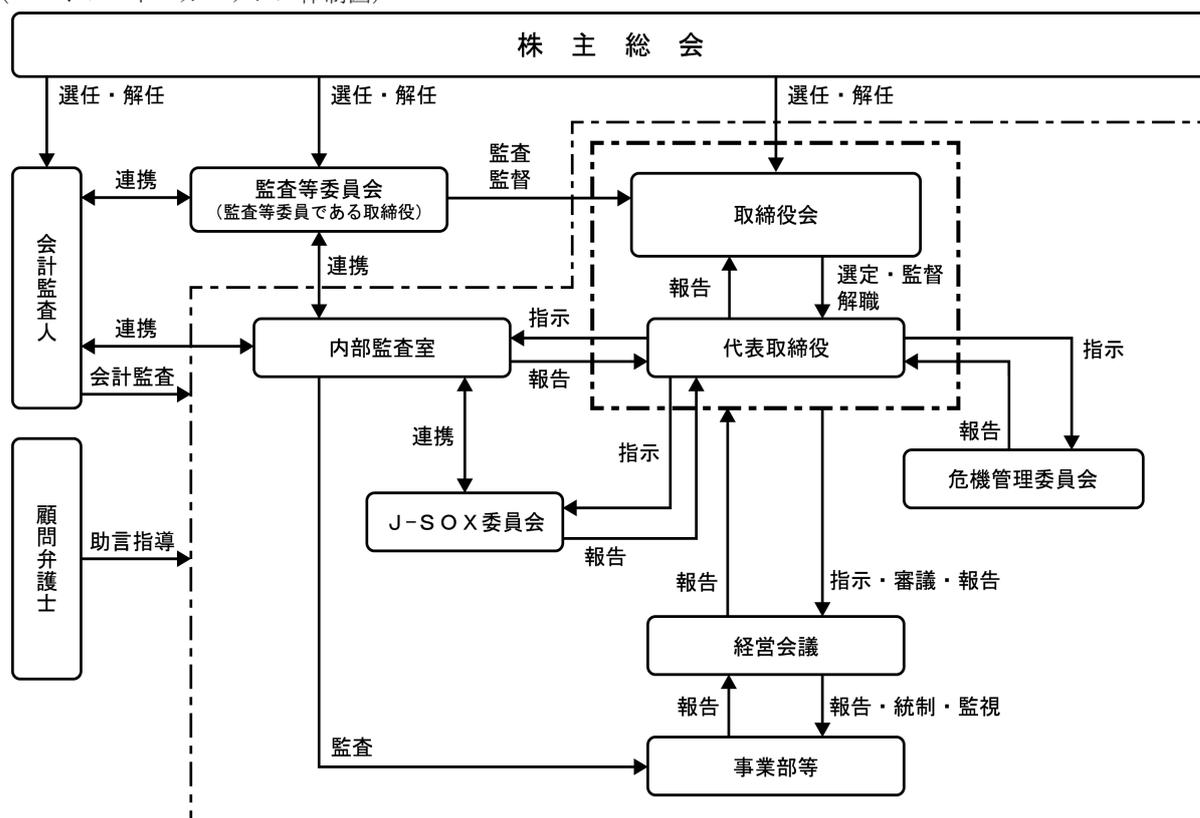
監査等委員会は、常勤の監査等委員である取締役1名と監査等委員である社外取締役3名で構成されます。原則として毎月1回開催しており、内部監査室と連携し、取締役の業務執行の違法性及び妥当性について監視を行い、重要な意思決定については適宜意見を述べております。

経営会議は、常勤の取締役6名と執行役員8名で構成されます。原則として毎月1回開催しており、経営方針の徹底、業務執行に関する重要事項の協議、進捗状況の報告・監視を行っております。

危機管理委員会は、常勤の取締役6名と管理部門の執行役員等で構成されます。原則として毎月1回開催しており、リスクに関する発生把握及び危機管理規程の見直しについて対処しております。

J-SOX委員会は、金融商品取引法に基づく内部統制システムを構築・運営する機関であり、内部監査室長を委員長とし、原則として毎月1回開催しており、内部統制運用状況の確認、内部統制上の問題点の抽出と検討を行っております。

(コーポレート・ガバナンス体制図)



機関ごとの構成員は次のとおりであります。(◎は議長、委員長)

役職名	氏名	取締役会	監査等委員会	経営会議	危機管理委員会	J-SOX委員会
代表取締役会長	牛島 豊	○		○	○	
代表取締役社長	井上 貴功	◎		○	◎	
取締役	酒井竜太郎	○		○	○	
取締役	長野 悟	○		○	○	
取締役	山下 智己	○		◎	○	○
取締役	田丸 俊次	○	◎	○	○	
社外取締役	天野 忠彦	○	○			
社外取締役	五味 洋行	○	○			
社外取締役	瀬戸川礼子	○	○			
執行役員	吉野 貴之			○	○	○
執行役員	小倉 功			○	○	
執行役員	刈屋 文夫			○		○
執行役員	小野田友彦			○		
執行役員	山根 光則			○		
執行役員	落合 努			○		
執行役員	高尾 良平			○		
執行役員	高橋 晶			○	○	○
内部監査室長	内藤 隆司				○	◎
その他社員					1名	11名

### ③ 企業統治に関するその他の事項

#### (内部統制システムの整備の状況)

当社は、会社法及び会社法施行規則に基づき、当社及び関係会社における業務の適正を確保するための必要な体制を整備しております。

#### イ. 取締役及び使用人の職務執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

当社は、経営方針に則った「コンプライアンス方針」を定め、取締役及び使用人が法令、定款及び社内規則を遵守した行動をとるための規範としており、継続的なコンプライアンス教育・研修の実施により、法令遵守意識の定着と周知徹底を図っております。

また、内部監査部門はコンプライアンス状況について監査を行い、その監査結果を社長へ報告すると共に必要に応じ改善指示を通知し、そのフォローアップを行うものとしております。

なお、法令上疑義のある行為等についての通報に応ずる内部通報制度を設け、早期に発見し是正する体制を構築するとともに、通報者の保護に十分配慮することとしております。

#### ロ. 取締役の職務執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

取締役の職務執行に係る情報については、文書または電磁的媒体（以下、「文書等」という。）にて記録・保存し、取締役は、常時これらの文書等を閲覧できる体制としております。文書等の管理については、文書管理及び情報セキュリティに関する規程並びに関連する諸規則等に基づき、実施される体制としております。

#### ハ. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

当社は、「危機管理規程」を定め、企業経営に関わる危機、リスクの発生防止及び発生時に損失を最小限に防止する体制を整えております。危機管理委員会においては、リスクに関する発生把握及び危機管理規程の見直しについて対処することとしております。また、発生時につきましては「BCPマニュアル」（情報セキュリティ関係においては「ISMSマニュアル」及び「個人情報保護マニュアル」）により、早期に解決することとしております。

#### ニ. 取締役の職務の執行が効率的に行われていることを確保するための体制

当社は、業務執行における大幅な権限委譲を伴う執行役員制度の導入により、監督責任と執行責任の明確化及び業務執行の迅速化に努めております。また各執行役員は取締役会から示された経営計画の達成を担っております。

取締役会は、毎月1回定時取締役会を開催しており、経営の基本方針、法令で定められた事項やその他経営に関する重要事項が全て付議され決定されると共に業務執行状況を監督する機関と位置付け、業績進捗につきましても議論し対策を検討し運用の充実を図っております。

また、取締役及び執行役員の出席による経営会議を毎月1回定時開催しており、経営方針の徹底、業務執行に関する重要事項の協議、進捗状況の報告、監視がなされております。

#### ホ. 当社及び子会社からなる企業集団における業務の適正を確保するための体制

当社は、当社の子会社の経営意思を尊重しつつ、当社の「関係会社管理規程」に基づき業務執行状況や損失及びリスク、法令及び定款の遵守状況等の必要事項に関して報告を求め、また当社が当該子会社に対し助言を行うことにより、子会社の経営が効率的に行われる体制を確保することとしております。

#### ヘ. 監査等委員会がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項

監査等委員会が必要とした場合、監査等委員会の職務を補助する使用人を置くものとしております。監査等委員会が指定する補助すべき期間中は、指名された使用人への指揮権は監査等委員会に移譲されたものとします。

#### ト. 前号の使用人の取締役からの独立性に関する事項

前号の使用人の人事（任命、異動、評定、懲戒）については、監査等委員会の同意を得るものとします。

チ. 当社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び使用人、並びに子会社の取締役及び使用人が監査等委員に報告をするための体制その他の監査等委員への報告に関する体制

法令及び定款違反、内部通報、その他会社に著しい損害を及ぼす恐れのある事実を発見した時は、当社の取締役及び使用人、並びに子会社の取締役及び使用人は、速やかに監査等委員へ報告を行うものとします。

リ. 監査等委員へ報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制

当社の定める内部通報制度規程において、監査等委員への内部通報について不利な取扱いを受けない旨を規定・施行します。

ヌ. 監査等委員の職務の執行について生ずる費用の前払または償還の手続きその他の当該職務の執行について生ずる費用または債務の処理に係る方針に関する事項

監査等委員がその職務の執行について、当社に対し費用の前払等の請求をした際には、担当部門において審議のうえ、当該請求に係る費用または債務が当該監査等委員の職務の執行に必要なものでないことを証明した場合を除き、速やかに当該費用または債務を処理します。

ル. その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

監査等委員は、取締役会や経営会議に出席し、監査等委員が希望するその他の重要な会議へも出席できるものとしております。また、監査等委員は、代表取締役との定期的な意見交換や会計監査人及び内部監査部門との情報交換を行い監査の実効性を確保するものとし、当社は、監査等委員の独立性を重んじ、その判断を尊重するとともに、監査が実効的に行われるために必要な協力を行うものとします。

ロ. 財務報告の信頼性と適正性を確保するための体制

当社及びその子会社は金融商品取引法の定めに従い、健全な内部統制環境の保持に努め、全社レベル及び業務プロセスレベルの統制活動の強化により、有効かつ正当な評価ができるよう内部統制システムを構築し、適切な運用に努めることにより財務報告の信頼性と適正性を確保することとしております。

ワ. 反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方及びその整備状況

当社は、市民生活の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力とは一切関係を遮断し、これらの者に対して毅然とした態度で対応することを基本方針としております。

反社会的勢力排除に向け、危機管理委員会による協議と対策マニュアルの整備を行っております。また、不当要求防止責任者を設置し、警察・弁護士等の外部の専門機関とも連携を図りつつ対応を行うものとしております。

（責任限定契約）

当社は、会社法第427条第1項に基づき、社外取締役との間において、会社法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任限度額は、法令が定める額としております。

（取締役の定数）

当社は取締役（監査等委員である取締役を除く。）の定数を10名以内、監査等委員である取締役の定数を5名以内とする旨を定款に定めております。

（取締役の選任の決議要件）

当社は、取締役の選任決議について、監査等委員である取締役とそれ以外の取締役とを区別して、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。

また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨を定款に定めております。

(自己の株式の取得)

当社は、経済環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行を可能とするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。

(中間配当)

当社は、株主への機動的な利益還元を可能とすることを目的として、取締役会の決議によって、毎年9月30日を基準日として中間配当をすることができる旨定款に定めております。

(株主総会の特別決議要件)

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。

これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

## (2) 【役員の状況】

## ① 役員一覧

男性 8名 女性 1名 (役員のうち女性の比率 11%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役 会長	牛島 豊	1949年10月31日生	1973年4月 日本オートメーションシステム株式会社 入社 1977年10月 当社入社 1990年5月 当社取締役システム本部長 1998年6月 当社常務取締役システム本部長 2005年6月 当社専務取締役 2009年4月 当社代表取締役副社長 2010年3月 当社代表取締役社長 2013年4月 当社代表取締役会長(現任)	(注) 2	350
代表取締役 社長	井上 貴功	1958年12月21日生	1981年4月 小杉産業株式会社入社 1983年4月 当社入社 2003年4月 当社執行役員コンサルティング事業部長 2009年6月 当社取締役執行役員営業統括部長 2011年4月 当社常務取締役執行役員営業統括部担当 2012年4月 当社代表取締役副社長執行役員営業統括 部担当 2013年4月 当社代表取締役社長(現任)	(注) 2	62
取締役 執行役員 金融第1ビジネス事業部担当 兼金融第2ビジネス事業部担当 兼公共ビジネス事業部担当 兼法人ビジネス事業部担当	酒井竜太郎	1964年6月3日生	1986年4月 株式会社イーディービー・サービス入社 1990年10月 合併により当社入社 2004年4月 当社バンキングビジネス事業部第1部長 2015年4月 当社執行役員金融ビジネス事業部長 2016年4月 当社執行役員金融第1ビジネス事業部長 2018年6月 当社取締役執行役員金融第1ビジネス事 業部担当兼金融第2ビジネス事業部担当 株式会社クロスユーアイエス取締役(現 任) 2019年4月 当社取締役執行役員金融第1ビジネス事 業部担当兼金融第2ビジネス事業部担当 兼公共ビジネス事業部担当兼法人ビジネ ス事業部担当(現任)	(注) 2	11
取締役 執行役員 営業統括部担当 兼仙台支店担当	長野 悟	1959年9月14日生	1982年4月 富士通株式会社入社 2015年4月 当社入社 営業統括部統括部長代理 2016年4月 当社法人ビジネス事業部長 2016年7月 当社執行役員法人ビジネス事業部長 2017年4月 当社執行役員公共ビジネス事業部長 2018年6月 当社取締役執行役員公共ビジネス事業部 担当兼法人ビジネス事業部担当 2019年4月 当社取締役執行役員営業統括部担当兼仙 台支店担当(現任)	(注) 2	—
取締役 執行役員 経営財務統括部担当 兼管理統括部担当	山下 智己	1965年4月9日生	1988年4月 株式会社三菱銀行(現 株式会社三菱UF J銀行) 入行 2018年4月 当社入社 経営財務統括部経理部長 2018年6月 当社取締役執行役員経営財務統括部担当 兼管理統括部担当(現任)	(注) 2	0

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 (常勤監査等委員)	田丸 俊次	1958年11月24日生	1981年4月 株式会社ライフ（現 ライフカード株式会社）入社 1986年1月 当社入社 2004年4月 当社営業統括部管理部長 2006年4月 当社管理統括部購買部長 2009年4月 当社内部監査室長 2012年6月 当社常勤監査役 2015年6月 株式会社クロスユーアイエス監査役（現任） 2017年6月 当社取締役（監査等委員）（現任）	(注) 3	23
取締役 (監査等委員)	天野 忠彦	1946年8月5日生	1970年4月 富士通株式会社入社 1994年4月 NTTインターネット株式会社出向 1998年6月 NTTインターネット株式会社取締役 2005年7月 株式会社アイセック代表取締役 2013年9月 当社監査役 2015年6月 当社取締役 2017年6月 当社取締役（監査等委員）（現任）	(注) 3	—
取締役 (監査等委員)	五味 洋行	1946年9月6日生	1971年4月 株式会社野村電子計算センター（現 株式会社野村総合研究所）入社 1997年6月 株式会社野村総合研究所取締役 2001年6月 株式会社野村総合研究所常務取締役 2003年6月 株式会社中電シーティーアイ常務取締役 2005年6月 株式会社ハイマックス取締役副社長 2006年4月 株式会社ハイマックス代表取締役社長 2010年6月 株式会社エグゼクティブ・パートナーズ理事 2015年6月 当社監査役 2016年6月 株式会社イーアイティー取締役（現任） 2017年6月 当社取締役（監査等委員）（現任） 2018年9月 株式会社エグゼクティブ・パートナーズ代表取締役（現任）	(注) 3	—
取締役 (監査等委員)	瀬戸川礼子	1966年12月21日生	1993年5月 株式会社オータパブリケーションズ入社 1997年5月 「週刊ホテルレストラン」副編集長 2001年1月 経営ジャーナリストとして独立 2013年4月 経済産業省「おもてなし経営企業選」選考委員（2期） 2014年4月 中小企業庁 政策審議臨時委員（現任） 2014年4月 中小企業庁「はばたく中小企業」選考委員（現任） 2014年10月 ホワイト企業大賞委員（現任） 2019年6月 当社取締役（監査等委員）（現任）	(注) 3	—
計					446

- (注) 1. 取締役 天野忠彦、五味洋行、瀬戸川礼子は、社外取締役であります。
2. 取締役の任期は、2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から2020年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
3. 取締役（監査等委員）の任期は、2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から2021年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
4. 当社では、意思決定と業務執行の分離により取締役会の活性化を図るため、執行役員制度を導入しております。
- 執行役員は、上記取締役兼務3名の他、8名（経営財務統括部長 吉野貴之、管理統括部長 小倉 功、営業統括部長 刈屋文夫、金融第1ビジネス事業部長 小野田友彦、金融第2ビジネス事業部長 山根光則、公共ビジネス事業部長 落合 努、法人ビジネス事業部長 高尾良平、仙台支店長 高橋 晶）で構成されております。

## ② 社外役員の状況

当社は、社外からの視点での助言及び意思決定を行い、また独立の視点から業務執行を監査することによりコーポレート・ガバナンスの強化を図るため3名の監査等委員である社外取締役を選任しております。そのうち、五味洋行氏は、株式会社エグゼクティブ・パートナーズ代表取締役及び株式会社イーアイティー取締役を兼務しておりますが、当社と株式会社エグゼクティブ・パートナーズ及び株式会社イーアイティーとの間に特別な関係はありません。また、当社と天野忠彦、五味洋行、瀬戸川礼子の3氏との間に特別な利害関係はありません。

当社は、社外役員の独立性に関する基準・方針については、規定等による特段の定めは設けておりませんが、選任にあたっては、東京証券取引所の定める独立役員に関する基準等を参考にしております。なお、当社は、天野忠彦、五味洋行、瀬戸川礼子の3氏を独立役員に選任しております。

## ③ 社外取締役による監督又は監査と内部監査、監査等委員監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、客観的、中立的な立場から、取締役会へ出席し、積極的な意見を提言しております。また、サポート体制として、内部監査部門及び会計監査人とは、必要に応じ取締役及び常勤の監査等委員である取締役を通じて監査状況や監査結果について説明、報告を受けるとともに情報交換を行い相互連携しております。

## (3) 【監査の状況】

### ① 監査等委員会監査の状況

当社における監査等委員会監査は、4名の監査等委員のうち3名を社外取締役とし、監査等委員会が定めた監査方針のもと、取締役会への出席、業務状況の調査などを通じ、取締役の職務遂行の監査を行っております。また、常勤の監査等委員は、取締役会のほか経営会議等の重要会議にも常時出席し、経営戦略上のリスク管理を含めチェック機能の強化に努めております。常勤の監査等委員 田丸俊次氏は、当社の営業管理業務、購買業務の実務に精通しており、また内部監査室長としての業務経験があることから、監査等委員として必要な経営監視に関する相当程度の知見を有しております。監査等委員である社外取締役 天野忠彦、五味洋行両氏は、長きに亘り在籍した情報サービス産業に関する知識と企業経営者としての豊富なビジネス経験と幅広い知見を有しております。また、監査等委員である社外取締役 瀬戸川礼子氏は、ジャーナリスト、中小企業診断士、講演講師、政府関連及び民間の各種選考委員として幅広く活躍しており、多くの会社経営者と接点を持つ経験を有しております。

### ② 内部監査の状況

当社における内部監査は、社長直轄の内部監査室が、常勤の監査等委員との協力体制のもと内部監査を実施し、その結果を社長に報告するとともに各部門に適切な指導を行っております。また、財務報告に係る内部統制については、内部監査室長を委員長とするJ-SOX委員会が評価・監査を実施しております。会計監査人との連携を重視し、定期的な意見交換を通じ法令等の遵守及びリスク管理等に関する内部統制システムの有効性について確認しております。

また、コーポレート・ガバナンスの充実の観点から、内部監査、監査等委員会監査及び会計監査人の会計監査の相互連携に努めています。外部からの客観的、中立の経営監視機能を重要と考えており、社外取締役である3名の監査等委員及び会計監査人と必要に応じた情報・意見交換により相互連携することで経営監視体制の充実、強化を進めております。

### ③ 会計監査の状況

#### a. 監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

#### b. 業務を執行した公認会計士

板谷 宏之  
森田 浩之

#### c. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士2名、会計士試験合格者2名、その他3名であります。

d. 監査法人の選定方針と理由

当社は、監査法人の品質管理体制、監査の実施体制、監査報酬及び独立性、専門性等を総合的に判断して、監査法人を選定しております。

その上で、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合、必要に応じて監査等委員全員の同意により会計監査人を解任いたします。また、会計監査人の適格性、独立性及び職務の遂行状況等を勘案し、職務の執行に支障がある場合等、会計監査人の変更が必要であると判断した場合は、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定いたします。

e. 監査等委員及び監査等委員会による監査法人の評価

監査等委員会は、会計監査人から「職務の遂行が適正に行われることを確保するための体制」（会社計算規則第131条各号に掲げる事項）を「監査に関する品質管理基準」（平成17年10月28日企業会計審議会）等に従って整備している旨の説明を受けるとともに、会計監査人の監査計画、監査方法及び職務の執行状況を確認し、その適正性及び独立性等について評価しております。

④ 監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	24,800	—	23,500	—
連結子会社	—	—	—	—
計	24,800	—	23,500	—

b. 監査公認会計士と同一のネットワークに対する報酬 (a. を除く。)

区 分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	—	1,488	—	1,488
連結子会社	—	—	—	—
計	—	1,488	—	1,488

当社における非監査業務の内容は、デロイトトーマツ税理士法人が提供する税務相談サービス（1,200千円）及びトーマツイノベーション株式会社が提供する研修サービス（288千円）であります。

c. その他重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

監査報酬は監査日数等を勘案し決定しております。

e. 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

取締役会が提案した会計監査人に対する報酬等に対して、当社の監査等委員会が会社法第399条第1項の同意をした理由は、会計監査人との契約内容に照らして、監査計画、会計監査の職務遂行状況及び報酬見積りの算出根拠等を総合的に検討した結果、当該報酬等の額は相当であると判断したためであります。

#### (4) 【役員の報酬等】

##### ① 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

役員報酬は株主総会で決定された限度額の範囲内でその具体的金額を取締役会での協議にて、監査等委員である取締役については監査等委員会の協議で決定することとしております。

報酬額の算定につきましては、取締役については取締役の種類別による基準額、会社の業績見込み、業務内容、貢献度等を総合的に勘案し、監査等委員である取締役については、監査等委員会の協議で決定した基準に従って算定しております。

役員退職慰労金につきましては、第32期定時株主総会終結の時をもってこれを廃止しており、第32期までの在任期間に対応する退職慰労金の打切り支給に関してご承認をいただいております。

なお、提出会社の役員が当事業年度に受けている報酬等は、固定報酬のみであります。

##### ② 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額 (千円)		対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	業績連動報酬	
取締役 (監査等委員及び社外 取締役を除く。)	132,435	132,435	—	7
監査等委員 (社外取締役を除く。)	13,860	13,860	—	1
社外役員	10,080	10,080	—	2

(注) 1. 取締役(監査等委員を除く。)の報酬限度額は、2017年6月28日開催の第44期定時株主総会において、年額300百万円以内と決議されております。

2. 取締役(監査等委員)の報酬限度額は、2017年6月28日開催の第44期定時株主総会において、年額60百万円以内と決議されております。

3. 社外役員として兼任している当社子会社の役員への役員報酬等はありません。

##### ③ 役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

##### ④ 使用人兼務役員の使用人分の給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

##### ⑤ 役員の報酬等の額の決定過程における取締役会の活動内容

取締役の種類ごとの基準額に会社の業績見込み、業務内容、貢献度等を勘案して策定された報酬案についての妥当性を検討・協議し、報酬額等を決定します。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、株式の値上がりや配当によって利益を得ることを目的として保有する株式を純投資目的の投資株式、それ以外の株式を政策保有株式に区分しております。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、純投資以外の目的で上場株式を保有するに際しては、投資先との関係維持または強化等の必要性、中長期的な経済合理性、将来の見通し等を併せて厳正に審査し、合理性が認められた場合のみ、保有します。

上場株式を含めた当社の資産ポートフォリオについては、取締役会にて、個別銘柄毎に、中長期的の経済合理性や将来の見通しを踏まえ、毎年その保有意義を見直しております。保有意義が薄れたと考えられる投資株式については、株主として相手先企業と必要十分な対話を行います。その結果、改善が認められない株式については、適時・適切に売却します。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(千円)
非上場株式	2	200
非上場株式以外の株式	11	855,020

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(千円)	株式数の増加の理由
非上場株式	—	—	—
非上場株式以外の株式	1	2,446	取引先の持株会を通じた取得

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(千円)
非上場株式	1	15,400
非上場株式以外の株式	—	—

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
㈱システム情報	176,000	176,000	(保有目的)取引関係の維持・発展	有
	334,400	192,896		
TDCソフト㈱	352,000	176,000	(保有目的)取引関係の維持・発展 (増加理由)株式分割によるもの	有
	308,352	246,576		
アイエックス・ナレッジ ㈱	70,000	70,000	(保有目的)取引関係の維持・発展	有
	62,720	55,510		
富士通㈱	8,060	77,256	(保有目的)取引関係の維持・発展 (増加理由)株式併合及び取引先持株会 を通じた株式の取得	無
	64,374	50,587		
㈱昭和システムエンジニアリング	44,000	44,000	(保有目的)取引関係の維持・発展	有
	31,240	34,144		
㈱エヌ・ティ・ティ・データ	25,000	25,000	(保有目的)取引関係の維持・発展	無
	30,525	28,300		
㈱セゾン情報システムズ	8,400	8,400	(保有目的)取引関係の維持・発展	無
	12,196	15,111		
㈱みずほフィナンシャルグループ	14,700	14,700	(保有目的)取引関係の維持・発展	無
	2,518	2,813		
㈱コンコルディア・フィナンシャルグループ	20,000	20,000	(保有目的)取引関係の維持・発展	無
	8,540	11,740		

(注) 定量的な保有効果については記載が困難であります。保有の合理性は、保有目的、経済合理性、取引状況等により検証しております。

みなし保有株式

当社はみなし保有株式は保有しておりません。

③ 保有目的が純投資目的である投資株式

区分	当事業年度		前事業年度	
	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計 上額の合計額 (千円)	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計 上額の合計額 (千円)
非上場株式	2	200	3	6,266
非上場株式以外の株式	1	153	1	194

区分	当事業年度		
	受取配当金の 合計額(千円)	売却損益の 合計額(千円)	評価損益の 合計額(千円)
非上場株式	—	9,333	—
非上場株式以外の株式	5	—	—

④ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの該当事項はありません。

⑤ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの該当事項はありません。

## 第5 【経理の状況】

### 1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

### 2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

### 3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、公益財団法人財務会計基準機構への加入及び、会計基準設定主体等の行う研修へ積極的に参加し、会計基準等の内容を適切に把握して会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	1,240,807	1,062,894
受取手形及び売掛金	2,620,889	3,074,760
仕掛品	58,402	70,846
その他	57,764	53,967
貸倒引当金	△2,598	△3,057
流動資産合計	3,975,264	4,259,410
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	335,415	328,921
減価償却累計額	△137,492	△153,299
建物及び構築物 (純額)	197,922	175,621
工具、器具及び備品	208,193	213,439
減価償却累計額	△122,878	△145,141
工具、器具及び備品 (純額)	85,314	68,298
土地	32,998	32,998
その他	8,347	5,604
減価償却累計額	△7,425	△5,226
その他 (純額)	922	377
有形固定資産合計	317,157	277,295
無形固定資産		
のれん	142,504	108,973
ソフトウェア	35,332	31,683
その他	7,113	2,899
無形固定資産合計	184,950	143,557
投資その他の資産		
投資有価証券	644,139	855,220
繰延税金資産	99,927	26,410
敷金及び保証金	224,217	216,784
退職給付に係る資産	14,418	-
その他	37,487	37,957
投資その他の資産合計	1,020,190	1,136,373
固定資産合計	1,522,298	1,557,225
資産合計	5,497,563	5,816,636

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	404,707	360,964
短期借入金	400,000	300,000
未払法人税等	213,772	163,313
賞与引当金	220,128	202,310
受注損失引当金	2,500	-
その他	542,019	532,408
流動負債合計	1,783,127	1,558,997
固定負債		
退職給付に係る負債	413,782	428,854
資産除去債務	90,971	91,670
その他	21,000	21,000
固定負債合計	525,754	541,525
負債合計	2,308,881	2,100,522
純資産の部		
株主資本		
資本金	459,237	459,237
資本剰余金	61,191	61,191
利益剰余金	2,729,948	3,118,129
自己株式	△349,863	△349,897
株主資本合計	2,900,512	3,288,660
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	264,377	413,337
退職給付に係る調整累計額	23,791	14,116
その他の包括利益累計額合計	288,168	427,453
純資産合計	3,188,681	3,716,113
負債純資産合計	5,497,563	5,816,636

② 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	9,713,448	9,769,549
売上原価	※3 7,611,290	7,604,874
売上総利益	2,102,158	2,164,675
販売費及び一般管理費	※1, ※2 1,397,246	※1, ※2 1,448,744
営業利益	704,911	715,930
営業外収益		
受取利息	8	10
受取配当金	12,302	13,301
保険配当金	4,553	290
助成金収入	5,419	5,670
受取家賃	5,661	4,726
その他	7,427	6,111
営業外収益合計	35,372	30,109
営業外費用		
支払利息	459	304
支払手数料	165	-
雑損失	-	759
営業外費用合計	624	1,064
経常利益	739,659	744,976
特別利益		
投資有価証券売却益	0	9,333
受取保険金	-	62,000
有形固定資産売却益	-	0
特別利益合計	0	71,334
特別損失		
会員権評価損	4,020	-
特別損失合計	4,020	-
税金等調整前当期純利益	735,640	816,311
法人税、住民税及び事業税	283,510	268,440
法人税等調整額	△21,473	12,045
法人税等合計	262,036	280,486
当期純利益	473,604	535,824
非支配株主に帰属する当期純利益	-	-
親会社株主に帰属する当期純利益	473,604	535,824

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期純利益	473,604	535,824
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	94,480	148,959
退職給付に係る調整額	20,230	△9,675
その他の包括利益合計	※1 114,711	※1 139,284
包括利益	588,315	675,109
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	588,315	675,109
非支配株主に係る包括利益	-	-

③ 【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	459,237	61,191	2,382,381	△235,063	2,667,745
当期変動額					
剰余金の配当			△126,036		△126,036
親会社株主に帰属する当期純利益			473,604		473,604
自己株式の取得				△114,800	△114,800
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	—	347,567	△114,800	232,767
当期末残高	459,237	61,191	2,729,948	△349,863	2,900,512

	その他の包括利益累計額			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	169,896	3,561	173,457	2,841,203
当期変動額				
剰余金の配当				△126,036
親会社株主に帰属する当期純利益				473,604
自己株式の取得				△114,800
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	94,480	20,230	114,711	114,711
当期変動額合計	94,480	20,230	114,711	347,478
当期末残高	264,377	23,791	288,168	3,188,681

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	459,237	61,191	2,729,948	△349,863	2,900,512
当期変動額					
剰余金の配当			△147,644		△147,644
親会社株主に帰属する当期純利益			535,824		535,824
自己株式の取得				△33	△33
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	—	388,180	△33	388,147
当期末残高	459,237	61,191	3,118,129	△349,897	3,288,660

	その他の包括利益累計額			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	264,377	23,791	288,168	3,188,681
当期変動額				
剰余金の配当				△147,644
親会社株主に帰属する当期純利益				535,824
自己株式の取得				△33
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	148,959	△9,675	139,284	139,284
当期変動額合計	148,959	△9,675	139,284	527,431
当期末残高	413,337	14,116	427,453	3,716,113

## ④ 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益	735,640	816,311
減価償却費	81,776	75,063
のれん償却額	33,530	33,530
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	141	458
賞与引当金の増減額 (△は減少)	16,499	△17,817
受注損失引当金の増減額 (△は減少)	2,500	△2,500
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	25,704	10,500
退職給付に係る資産の増減額 (△は増加)	12,500	5,045
受取利息及び受取配当金	△12,310	△13,311
支払利息	459	304
会員権評価損	4,020	-
投資有価証券売却益	0	△9,333
受取保険金	-	△62,000
売上債権の増減額 (△は増加)	△142,636	△453,870
たな卸資産の増減額 (△は増加)	17,766	△12,443
仕入債務の増減額 (△は減少)	34,409	△43,742
その他	35,653	7,876
小計	845,654	334,069
利息及び配当金の受取額	12,310	13,311
利息の支払額	△402	△315
保険金の受取額	-	62,000
法人税等の支払額	△188,503	△316,829
営業活動によるキャッシュ・フロー	669,059	92,237
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
有形固定資産の取得による支出	△17,382	△12,949
資産除去債務の履行による支出	-	△4,474
投資有価証券の取得による支出	△2,496	△2,446
投資有価証券の売却による収入	37,025	15,400
無形固定資産の取得による支出	△16,850	△25,435
敷金及び保証金の差入による支出	△1,251	△2,651
敷金及び保証金の回収による収入	1,540	10,084
投資活動によるキャッシュ・フロー	584	△22,472
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	△100,000	△100,000
自己株式の取得による支出	△114,800	△33
配当金の支払額	△126,036	△147,644
財務活動によるキャッシュ・フロー	△340,836	△247,677
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	328,806	△177,912
現金及び現金同等物の期首残高	912,000	1,240,807
現金及び現金同等物の期末残高	※1 1,240,807	※1 1,062,894

## 【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

### 1. 連結の範囲に関する事項

すべての子会社を連結しております。

連結子会社の数 1社

連結子会社の名称 株式会社クロスユーアイエス

### 2. 持分法の適用に関する事項

該当事項はありません。

### 3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

### 4. 会計方針に関する事項

#### (1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

##### ① 有価証券

その他の有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は、全部純資産直入法により処理し、売却原価は、移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

##### ② たな卸資産

仕掛品

個別法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

#### (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

##### ① 有形固定資産

定率法(ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物は定額法)

なお、主な耐用年数は以下のとおりです。

建物及び構築物 3年～20年

工具、器具及び備品 3年～6年

##### ② 無形固定資産

定額法

なお、市場販売目的のソフトウェアについては、見込販売収益に基づく償却額と残存有効期間(3年)に基づく均等配分額とを比較し、いずれか多い金額をもって償却し、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(3年～5年)に基づく定額法によっております。

#### (3) 重要な引当金の計上基準

##### ① 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

##### ② 賞与引当金

従業員の賞与の支払に備えるため、当連結会計年度に負担すべき支給見込額を計上しております。

##### ③ 受注損失引当金

請負開発契約に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度末における請負開発契約に係る損失見込額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理することとしております。

③ 小規模企業等における簡便法の採用

連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

ソフトウェアの請負開発契約に係る収益の計上基準

当連結会計年度までの進捗部分について成果の確実性が認められる契約については工事進行基準を、その他の契約については検収基準を適用しております。なお、進捗率の見積りについては、原価比例法を用いております。

(6) のれんの償却方法及び償却期間

7年間の定額法により償却しております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期的な投資からなっております。

(8) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっており、資産に係る控除対象外消費税及び地方消費税は当連結会計年度の費用として処理しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 平成30年3月30日）
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日）

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)を当連結会計年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しました。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」114,155千円及び「固定負債」の「繰延税金負債」14,227千円は「投資その他の資産」の「繰延税金資産」99,927千円に含めて表示しております。

(連結貸借対照表関係)

- 1 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行6行と当座貸越契約及び貸出コミットメント契約を締結しております。

当連結会計年度末における当座貸越契約及び貸出コミットメントに係る借入金未実行残高等は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
当座貸越極度額 及び貸出コミットメントの総額	2,200,000千円	2,200,000千円
借入実行残高	400,000	300,000
差引額	1,800,000	1,900,000

(連結損益計算書関係)

- ※1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給料手当	455,987千円	454,875千円
役員報酬	177,339	183,804
地代家賃	105,796	107,986
法定福利費	96,848	96,393
賞与引当金繰入額	78,551	84,217
のれん償却額	33,530	33,530
退職給付費用	24,026	23,712

- ※2 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費の総額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
一般管理費	9,446千円	11,244千円
当期製造費用	—	—
計	9,446	11,244

- ※3 売上原価に含まれている受注損失引当金繰入額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	2,500千円	—千円

(連結包括利益計算書関係)

※1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

(千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	135,328	214,701
組替調整額	—	—
税効果調整前	135,328	214,701
税効果額	△40,847	△65,741
その他有価証券評価差額金	94,480	148,959
退職給付に係る調整額		
当期発生額	16,497	△18,955
組替調整額	12,661	5,010
税効果調整前	29,158	△13,945
税効果額	△8,928	4,270
退職給付に係る調整額	20,230	△9,675
その他の包括利益合計	114,711	139,284

## (連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

## 1. 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
普通株式	9,210,960	—	—	9,210,960

## 2. 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
普通株式	808,494	200,000	—	1,008,494

(変動事由の概要)

2017年5月23日開催の取締役決議による自己株式の取得 200,000株

## 3. 配当に関する事項

## (1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2017年6月28日 定時株主総会	普通株式	126,036	15	2017年3月31日	2017年6月29日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	147,644	18	2018年3月31日	2018年6月28日

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

## 1. 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
普通株式	9,210,960	—	—	9,210,960

## 2. 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
普通株式	1,008,494	29	—	1,008,523

(変動事由の概要)

単元未満株の買取りによるものであります。

## 3. 配当に関する事項

## (1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	147,644	18	2018年3月31日	2018年6月28日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年6月26日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	164,048	20	2019年3月31日	2019年6月27日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金及び預金	1,240,807千円	1,062,894千円
預入期間が3か月を超える 定期預金	—	—
現金及び現金同等物	1,240,807	1,062,894

(金融商品関係)

#### 1. 金融商品の状況に関する事項

当社グループは、設備投資計画や資金繰りに照らして、必要な資金を銀行借入金により調達しており、一時的な余資は主に流動性の高い金融資産で運用しております。また、デリバティブ取引は後述するリスクを回避するために利用し、投機的な取引は行わない方針であります。

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。営業部門は、販売管理規程に則り主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引先ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化による回収懸念の早期把握や軽減を図ることによってリスクを管理しております。

投資有価証券は主として業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されておりますが、四半期ごとに時価や取引先企業の財務状況を把握し、保有状況を見直すことによりリスクを管理しております。

敷金及び保証金は、主に当社グループの事業所の賃貸借契約に伴うものであり、差入先の信用リスクに晒されておりますが、差入先の信用状況を定期的に把握する体制としております。

営業債務である買掛金は、そのほとんどが1ヶ月以内の支払期日であります。

それらの支払については、適時に資金繰り計画を作成・更新するとともに手許流動性の維持などにより資金調達に係る流動性リスクを管理しております。

借入金の使途は運転資金及び設備投資資金であり、当社は銀行借入金により調達しております。それに係る支払金利の変動リスクを抑制するため金利スワップ取引を利用する場合がありますが、そのデリバティブ取引については、取引権限及び取引限度額等を定めた社内ルールに従い、執行・管理しております。

#### 2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれておりません(注)2を参照ください。)

前連結会計年度(2018年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (千円)(*)	時価(千円)(*)	差額(千円)(*)
(1) 現金及び預金	1,240,807	1,240,807	—
(2) 受取手形及び売掛金	2,620,889	2,620,889	—
(3) 投資有価証券	637,872	637,872	—
(4) 敷金保証金	224,217	205,673	△18,544
(5) 買掛金	(404,707)	(404,707)	—
(6) 短期借入金	(400,000)	(400,000)	—
(7) 未払法人税等	(213,772)	(213,772)	—

(※) 負債に計上されているものは、( )で表示しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (千円)(*)	時価(千円)(*)	差額(千円)(*)
(1) 現金及び預金	1,062,894	1,062,894	—
(2) 受取手形及び売掛金	3,074,760	3,074,760	—
(3) 投資有価証券	855,020	855,020	—
(4) 敷金保証金	216,784	204,460	△12,324
(5) 買掛金	(360,964)	(360,964)	—
(6) 短期借入金	(300,000)	(300,000)	—
(7) 未払法人税等	(163,313)	(163,313)	—

(※) 負債に計上されているものは、( ) で表示しております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

(1) 現金及び預金、並びに(2) 受取手形及び売掛金

これらはすべて短期で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。

(4) 敷金保証金

敷金及び保証金の時価については、合理的に見積った返還予定時期に基づき、国債の利率で割り引いて算定する方法によっております。

(5) 買掛金、(6) 短期借入金、(7) 未払法人税等

これらはすべて短期で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(注) 2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額  
(千円)

区分	2018年3月31日	2019年3月31日
非上場株式	6,266	200

(注) 非上場株式については、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積もることができず時価を把握することが困難と認められることから、「(3) 投資有価証券」には含めておりません。

(注) 3. 金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額  
前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超(千円)
現金及び預金	1,240,807	—	—	—
受取手形及び売掛金	2,620,889	—	—	—
敷金及び保証金	9,395	—	—	214,821

(注) 上記の「現金及び預金」には現金を含めております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超(千円)
現金及び預金	1,062,894	—	—	—
受取手形及び売掛金	3,074,760	—	—	—
敷金及び保証金	584	—	12,496	203,703

(注) 上記の「現金及び預金」には現金を含めております。

(注) 4. その他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額  
前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	400,000	—	—	—	—	—

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	300,000	—	—	—	—	—

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	637,872	256,816	381,056
小計	637,872	256,816	381,056
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	0	0	0
小計	0	0	0
合計	637,872	256,816	381,056

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額 6,266千円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

なお、その他有価証券で時価のあるものについては、時価が取得価格に比し50%以上下落した場合は、合理的な反証がない限り時価の回復可能性がないものとして減損処理を実施し、下落率が30%以上50%未満の場合には、時価の回復可能性の判定を行い減損処理の要否を決定しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	846,480	249,798	596,681
小計	846,480	249,798	596,681
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	8,540	9,463	△923
小計	8,540	9,463	△923
合計	855,020	259,262	595,758

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額 200千円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

なお、その他有価証券で時価のあるものについては、時価が取得価格に比し50%以上下落した場合は、合理的

な反証がない限り時価の回復可能性がないものとして減損処理を実施し、下落率が30%以上50%未満の場合には、時価の回復可能性の判定を行い減損処理の要否を決定しております。

2. 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

区分	売却額 (千円)	売却益の合計額 (千円)	売却損の合計額 (千円)
株式	15,400	9,333	—
合計	15,400	9,333	—

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、退職給付制度として確定給付型の企業年金制度、確定拠出制度及び退職一時金制度を採用しております。

また、連結子会社は確定拠出制度及び退職一時金制度を採用しております。なお、連結子会社が有する退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表 (簡便法を適用した制度を除く)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	1,083,646	1,123,467
勤務費用	89,604	91,399
利息費用	3,617	3,370
数理計算上の差異の発生額	4,608	7,608
退職給付の支払額	△58,009	△100,449
退職給付債務の期末残高	1,123,467	1,125,397

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表 (簡便法を適用した制度を除く)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
年金資産の期首残高	714,731	754,278
期待運用収益	12,507	13,199
数理計算上の差異の発生額	21,105	△11,346
事業主からの拠出額	43,929	43,544
退職給付の支払額	△37,996	△65,900
年金資産の期末残高	754,278	733,775

(3) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	21,402	30,174
退職給付費用	10,325	9,704
退職給付の支払額	△1,553	△2,646
退職給付に係る負債の期末残高	30,174	37,232

(4) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	739,860	740,285
年金資産	△754,278	△733,775
	△14,418	6,509
非積立型制度の退職給付債務	413,782	422,345
連結貸借対照表に計上された 負債と資産の純額	399,364	428,854
退職給付に係る負債	413,782	428,854
退職給付に係る資産	△14,418	—
連結貸借対照表に計上された 負債と資産の純額	399,364	428,854

(注) 簡便法を適用した制度を含みます。

(5) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	89,604	91,399
利息費用	3,617	3,370
期待運用収益	△12,507	△13,199
数理計算上の差異の費用処理額	12,661	5,010
簡便法で計算した退職給付費用	10,325	9,704
確定給付制度に係る退職給付費用	103,701	96,285

(6) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
数理計算上の差異	29,158	△13,945
合計	29,158	△13,945

(7) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識数理計算上の差異	34,291	20,346
合計	34,291	20,346

(8) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
株式	37%	34%
債券	20%	23%
一般勘定	41%	42%
その他	2%	1%
合計	100%	100%

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(9) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表わしております。)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
割引率	0.3%	0.2%
長期期待運用収益率	1.75%	1.75%

なお、当社はポイント制を採用しており、退職給付債務の計算の基礎に予想昇給率は使用しておりません。

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度 70,109千円、当連結会計年度 70,141千円であります。

## (税効果会計関係)

## 1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付に係る負債	127,596千円	132,421千円
賞与引当金	68,371	62,860
未払法定福利費	11,786	11,163
未払費用	10,438	6,311
資産除去債務	29,924	28,864
未払事業税	16,642	13,645
長期未払金	6,430	6,430
その他	31,463	26,809
繰延税金資産小計	302,652	288,505
評価性引当額	△57,782	△58,100
繰延税金資産合計	244,870	230,404
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△116,679	△182,421
資産除去債務に対応する除去費用	△23,848	△21,573
退職給付に係る資産	△4,414	—
繰延税金負債合計	△144,943	△203,994
繰延税金資産純額	99,927	26,410

## 2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.9%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.9	1.7
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.1	△0.1
住民税均等割	0.4	0.3
のれん償却額	1.4	1.3
評価性引当額	0.7	0.0
その他	0.4	0.6
税効果会計適用後の法人税率等の負担率	35.6	34.4

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

(1) 当該資産除去債務の概要

事業用社屋の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務等であります。

(2) 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を取得から20年と見積もり、割引率は主として1.0%を使用して資産除去債務の金額を計算しております。

(3) 当該資産除去債務の総額の増減

前連結会計年度において、資産の除去時点において必要とされる除去費用が、固定資産取得時における見積額を大幅に超過する見込みであることが明らかになったことから、変更前の資産除去債務残高に6,779千円加算しております。資産除去債務の残高の推移は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
期首残高	88,017千円	95,500千円
時の経過による調整額	703	698
見積りの変更による増加額	6,779	—
資産除去債務の履行による減少額	—	△4,528
期末残高	95,500	91,670

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社グループは、情報サービス事業並びにこれらの付帯業務の単一事業であり、重要性が乏しいため、セグメント情報の記載を省略しております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービス区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

顧客の名称又は氏名	売上高（千円）	関連するセグメント名
富士通株式会社	1,609,578	—
株式会社エヌ・ティ・ティ・データ	942,248	—
日本アイ・ビー・エム株式会社	888,859	—

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービス区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

顧客の名称又は氏名	売上高（千円）	関連するセグメント名
富士通株式会社	1,743,609	—
株式会社エヌ・ティ・ティ・データ	1,297,271	—
日本アイ・ビー・エム株式会社	1,008,077	—

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

当社グループは、情報サービス事業並びにこれらの付帯業務の単一事業であるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	388.75円	453.05円
1株当たり当期純利益金額	57.54円	65.32円

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(千円)	473,604	535,824
普通株主に帰属しない金額(千円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益(千円)	473,604	535,824
普通株式の期中平均株式数(株)	8,231,507	8,202,454

(重要な後発事象)

(資本準備金の額の減少及び利益剰余金(その他利益剰余金)の額の減少並びに資本金の額の増加)

当社は、2019年5月14日開催の取締役会において、2019年6月26日開催の第46期定時株主総会に、資本準備金の額の減少及び利益剰余金(その他利益剰余金)の額の減少並びに資本金の額の増加について付議することを決議し、同日の株主総会において承認されました。

1. 資本準備金の額の減少及び利益剰余金(その他利益剰余金)の額の減少並びに資本金の額の増加の目的  
資本金を充実させ、財政基盤の強化を図るため、資本準備金及び利益剰余金(その他利益剰余金)を資本金に組み入れるものです。
2. 減少する資本準備金の額及び減少する利益剰余金の額並びに資本金の額の増加の方法  
会社法第448条第1項の規定により、資本準備金61,191,144円のうち、61,191,144円を資本金に組み入れます。  
また、会社法第450条第1項の規定により、利益剰余金2,823,418,513円のうち、479,571,712円を資本金に組み入れます。組み入れ後の資本金の額は10億円となります。
3. 資本準備金の額の減少及び利益剰余金(その他利益剰余金)の額の減少並びに資本金の額の増加の日程
  - (1) 取締役会決議日 2019年5月14日
  - (2) 株主総会決議日 2019年6月26日
  - (3) 効力発生日 2019年6月28日(予定)

(自己株式の取得)

当社は、2019年5月23日開催の取締役会において、会社法第165条第3項の規定により読み替えて適用される同法第156条の規定に基づき、自己株式を取得すること及びその具体的方法について決議いたしました。

1. 自己株式の取得に係る決議内容
  - (1) 自己株式の取得を行う理由  
経営環境の変化に対応した機動的な資本政策を遂行するため。
  - (2) 自己株式取得に関する取締役会決議内容
    - ① 取得対象株式の種類 当社普通株式
    - ② 取得し得る株式の総数 770,000株(上限)(発行済株式総数(自己株式を除く)に対する割合9.4%)
    - ③ 株式の取得価額の総額 783,860,000円(上限)
    - ④ 取得日 2019年5月24日
    - ⑤ 取得の方法 東京証券取引所の自己株式立会外買付取引(ToSTNeT-3)による買付け
2. 自己株式の取得結果  
上記決議に基づき、2019年5月24日に当社普通株式699,600株(取得価額712,192,800円)を取得し、当該決議に基づく自己株式の取得を終了しました。

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	400,000	300,000	0.40	—
合計	400,000	300,000	—	—

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

【資産除去債務明細表】

明細表に記載すべき事項が連結財務諸表規則第15条の23に規定する注記事項として記載されているため、記載を省略しております。

## (2) 【その他】

## 当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(千円)	2,152,612	4,703,266	6,967,795	9,769,549
税金等調整前四半期(当期) 純利益金額(千円)	122,501	331,748	460,588	816,311
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益金額 (千円)	77,223	219,411	286,310	535,824
1株当たり四半期(当期) 純利益金額(円)	9.41	26.75	34.91	65.32

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額 (円)	9.41	17.33	8.16	30.42

## 2 【財務諸表等】

### (1) 【財務諸表】

#### ① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	946,837	713,643
売掛金	2,420,670	2,896,730
仕掛品	37,421	64,486
前払費用	45,218	42,336
関係会社短期貸付金	70,000	-
その他	※1 9,317	※1 8,038
貸倒引当金	△2,420	△2,890
流動資産合計	3,527,044	3,722,345
固定資産		
有形固定資産		
建物	178,029	157,814
構築物	423	372
車両運搬具	922	377
工具、器具及び備品	53,439	44,002
土地	32,998	32,998
有形固定資産合計	265,812	235,565
無形固定資産		
ソフトウェア	29,929	28,081
電話加入権	2,391	2,391
その他	4,721	507
無形固定資産合計	37,043	30,981
投資その他の資産		
投資有価証券	644,139	855,220
繰延税金資産	87,935	11,177
敷金及び保証金	224,132	216,699
関係会社株式	250,000	250,000
役員に対する保険積立金	22,702	23,252
その他	14,785	14,705
投資その他の資産合計	1,243,695	1,371,055
固定資産合計	1,546,550	1,637,602
資産合計	5,073,595	5,359,948

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	※1 354,925	※1 312,604
短期借入金	400,000	300,000
未払金	※1 104,278	※1 111,735
未払費用	130,269	112,253
未払法人税等	165,581	127,759
未払消費税等	172,984	177,654
前受金	37,313	41,584
預り金	20,638	19,346
賞与引当金	189,697	171,574
受注損失引当金	2,500	-
その他	13,442	9,156
流動負債合計	1,591,630	1,383,668
固定負債		
長期末払金	21,000	21,000
退職給付引当金	403,481	411,968
資産除去債務	81,828	82,405
固定負債合計	506,309	515,374
負債合計	2,097,940	1,899,043
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	459,237	459,237
資本剰余金		
資本準備金	61,191	61,191
資本剰余金合計	61,191	61,191
利益剰余金		
利益準備金	53,618	53,618
その他利益剰余金	2,487,095	2,823,418
別途積立金	38,000	38,000
繰越利益剰余金	2,449,095	2,785,418
利益剰余金合計	2,540,714	2,877,036
自己株式	△349,863	△349,897
株主資本合計	2,711,278	3,047,567
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	264,377	413,337
評価・換算差額等合計	264,377	413,337
純資産合計	2,975,655	3,460,904
負債純資産合計	5,073,595	5,359,948

## ② 【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当事業年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
売上高	※1 8,402,506	※1 8,530,086
売上原価	※1 6,633,544	※1 6,660,251
売上総利益	1,768,961	1,869,835
販売費及び一般管理費	※1, ※2 1,187,644	※1, ※2 1,255,316
営業利益	581,316	614,519
営業外収益		
受取利息及び配当金	12,309	13,311
受取手数料	1,634	1,556
助成金収入	5,419	5,670
保険配当金	4,553	290
その他	※1 9,972	※1 8,786
営業外収益合計	33,890	29,615
営業外費用		
支払利息	459	304
その他	165	-
営業外費用合計	624	304
経常利益	614,582	643,829
特別利益		
投資有価証券売却益	0	9,333
受取保険金	-	62,000
固定資産売却益	-	0
特別利益合計	0	71,334
特別損失		
会員権評価損	4,020	-
特別損失合計	4,020	-
税引前当期純利益	610,563	715,164
法人税、住民税及び事業税	224,928	220,181
法人税等調整額	△19,943	11,016
法人税等合計	204,985	231,197
当期純利益	405,577	483,966

【売上原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)		
		金額 (千円)	構成比 (%)	金額 (千円)	構成比 (%)	
I 材料費	※1	238,907	3.6	183,472	2.7	
II 労務費		3,151,204	47.6	3,084,104	45.9	
III 外注費		2,891,487	43.7	3,114,087	46.3	
IV 経費		336,847	5.1	340,794	5.1	
当期総製造費用		6,618,446	100.0	6,722,459	100.0	
期首仕掛品たな卸高		70,937		37,421		
合計		6,689,383		6,759,880		
他勘定振替高		※2	20,917		32,642	
期末仕掛品たな卸高		37,421		64,486		
受注損失引当金戻入		—		2,500		
受注損失引当金繰入	2,500		—			
当期売上原価		6,633,544		6,660,251		

原価計算の方法

プロジェクト別の個別原価計算を採用しております。

なお、期中は予定原価を適用し、原価差額は期末において仕掛品、売上原価に配賦しております。

(注) ※1. 主な内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
地代家賃 (千円)	152,651	157,671
出張旅費 (千円)	53,744	41,150
減価償却費 (千円)	50,082	46,126
消耗品費 (千円)	17,003	25,271
通信費 (千円)	13,634	13,971
水道光熱費 (千円)	12,054	12,025
支払手数料 (千円)	21,331	29,606

※2. 他勘定振替高の内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
教育費 (千円)	1,214	2,070
採用費 (千円)	108	548
研究開発費 (千円)	9,446	11,244
ソフトウェア (千円)	9,619	11,412
保守料 (千円)	—	7,367
雑費 (千円)	529	—
合計 (千円)	20,917	32,642

③ 【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金	利益剰余金				利益剰余金合計
		資本準備金	利益準備金	その他利益剰余金			
				別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	459,237	61,191	53,618	38,000	2,169,555	2,261,173	
当期変動額							
剰余金の配当					△126,036	△126,036	
当期純利益					405,577	405,577	
自己株式の取得							
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）							
当期変動額合計	-	-	-	-	279,540	279,540	
当期末残高	459,237	61,191	53,618	38,000	2,449,095	2,540,714	

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△235,063	2,546,537	169,896	169,896	2,716,433
当期変動額					
剰余金の配当		△126,036			△126,036
当期純利益		405,577			405,577
自己株式の取得	△114,800	△114,800			△114,800
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）			94,480	94,480	94,480
当期変動額合計	△114,800	164,740	94,480	94,480	259,221
当期末残高	△349,863	2,711,278	264,377	264,377	2,975,655

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本					
	資本金	資本剰余金	利益剰余金			
		資本準備金	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計
				別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	459,237	61,191	53,618	38,000	2,449,095	2,540,714
当期変動額						
剰余金の配当					△147,644	△147,644
当期純利益					483,966	483,966
自己株式の取得						
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)						
当期変動額合計	-	-	-	-	336,322	336,322
当期末残高	459,237	61,191	53,618	38,000	2,785,418	2,877,036

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△349,863	2,711,278	264,377	264,377	2,975,655
当期変動額					
剰余金の配当		△147,644			△147,644
当期純利益		483,966			483,966
自己株式の取得	△33	△33			△33
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)			148,959	148,959	148,959
当期変動額合計	△33	336,289	148,959	148,959	485,249
当期末残高	△349,897	3,047,567	413,337	413,337	3,460,904

## 【注記事項】

(重要な会計方針)

### 1. 資産の評価基準及び評価方法

#### (1) 有価証券の評価基準及び評価方法

##### ① 子会社株式

移動平均法による原価法

##### ② その他有価証券

時価のあるもの

期末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

#### (2) たな卸資産の評価基準及び評価方法

仕掛品

個別法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

### 2. 固定資産の減価償却の方法

#### (1) 有形固定資産

定率法(ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物は定額法)

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 3～20年

工具、器具及び備品 3～6年

#### (2) 無形固定資産

定額法

なお、市場販売目的のソフトウェアについては、見込販売収益に基づく償却額と残存有効期間(3年)に基づく均等配分額とを比較し、いずれか多い金額をもって償却し、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(3年～5年)に基づく定額法によっております。

### 3. 引当金の計上基準

#### (1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

#### (2) 賞与引当金

従業員の賞与の支払に備えるため、当事業年度に負担すべき支給見込額を計上しております。

#### (3) 受注損失引当金

請負開発契約に係る将来の損失に備えるため、当事業年度末における請負開発契約に係る損失見込額を計上しております。

#### (4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

##### ① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

##### ② 数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

#### 4. 収益及び費用の計上基準

ソフトウェアの請負開発契約に係る収益の計上基準

当事業年度までの進捗部分について成果の確実性が認められる契約については工事進行基準を、その他の契約については検収基準を適用しております。なお、進捗率の見積もりについては、原価比例法を用いております。

#### 5. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

##### (1) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっており、資産に係る控除対象外消費税及び地方消費税は当事業年度の費用として処理しております。

##### (2) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表における会計処理の方法と異なっております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しました。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」88,591千円及び「固定負債」の「繰延税金負債」656千円は「投資その他の資産」の「繰延税金資産」87,935千円に含めて表示しております。

(貸借対照表関係)

#### ※1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務 (区分表示したものを除く)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	1,945千円	1,945千円
短期金銭債務	1,260	2,448

2 当社においては、運転資金の効率的な調達を行うため、取引銀行6行と当座貸越契約を締結しております。この契約に基づく事業年度末の借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
当座貸越契約の総額	2,200,000千円	2,200,000千円
借入実行残高	400,000	300,000
差引額	1,800,000	1,900,000

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業取引 (収入分)	950千円	一千円
営業取引 (支出分)	24,523	40,645
営業取引以外の取引 (収入分)	4,911	4,376

※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給料手当	379,661千円	383,609千円
役員報酬	149,910	156,375
地代家賃	107,796	107,091
支払手数料	63,077	87,233
法定福利費	79,167	79,929
賞与引当金繰入額	63,288	74,810
採用費	18,374	19,659
減価償却費	14,150	16,966
退職給付費用	22,201	21,350
おおよその割合		
販売費	29%	28%
一般管理費	71%	72%

(有価証券関係)

子会社株式は、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められるため、子会社株式の時価を記載しておりません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりです。

区 分	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
子会社株式	250,000千円	250,000千円
計	250,000	250,000

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
賞与引当金	58,085千円	52,535千円
未払事業所税	2,728	2,684
未払事業税	12,385	10,519
未払法定福利費	8,809	7,967
退職給付引当金	123,546	126,144
資産除去債務	26,442	25,232
未払費用	10,353	6,227
長期未払金	6,430	6,430
減損損失	4,938	4,938
その他	20,537	16,497
繰延税金資産小計	274,257	259,179
評価性引当額	△43,598	△40,917
繰延税金資産合計	230,659	218,262
繰延税金負債		
資産除去債務に対応する除却費用	△26,044	△24,664
その他有価証券評価差額金	△116,679	△182,421
繰延税金負債合計	△142,724	△207,085
繰延税金資産純額	87,935	11,177

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.9%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	2.3	1.9
住民税均等割	0.4	0.3
評価性引当額	0.1	△0.4
その他	△0.1	△0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	33.6	32.3

(重要な後発事象)

連結財務諸表の「注記事項(重要な後発事象)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

## ④ 【附属明細表】

## 【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)	当期末減価 償却累計額 又は償却累 計額(千円)	当期償却額 (千円)	差 引 当期末残高 (千円)
有形固定資産							
建物	301,198	454	6,948	294,704	136,889	20,229	157,814
構築物	7,457	—	—	7,457	7,084	50	372
車両運搬具	8,347	—	2,743	5,604	5,226	544	377
工具、器具及び備品	145,217	12,195	7,728	149,684	105,681	21,063	44,002
土地	32,998	—	—	32,998	—	—	32,998
有形固定資産計	495,218	12,650	17,420	490,449	254,883	41,887	235,565
無形固定資産							
ソフトウェア	82,487	18,816	24,168	77,135	49,053	20,664	28,081
電話加入権	2,391	—	—	2,391	—	—	2,391
その他	4,771	—	4,196	575	67	17	507
無形固定資産計	89,650	18,816	28,364	80,102	49,120	20,681	30,981

(注) 1. 「当期首残高」及び「当期末残高」は取得原価により記載しております。

2. 当期増加額及び減少額(△)の主な内容は次のとおりであります。

建物の減少	資産除去債務の履行による減少	△4,510千円
	レイアウト変更に伴う除却	△1,673千円
車両運搬具の減少	社有車売却による減少	△2,743千円
工具器具及び備品の増加	社内開発用パソコンの購入	9,825千円
	社内使用機の新規購入	1,370千円
	新卒採用活動向け他媒体製作費用	1,000千円
工具器具及び備品の減少	社内開発用旧型パソコンの除却	△7,728千円
ソフトウェアの増加	社内開発製品ソフトウェアの改修	15,756千円
	社内使用ソフトウェアの購入	3,060千円
ソフトウェアの減少	社内開発用ソフトウェアの除却	△24,168千円

3. 当期償却額には、資産除去債務に係る当期の償却費が含まれております。

## 【引当金明細表】

科目	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)
貸倒引当金	2,420	2,890	2,420	2,890
賞与引当金	189,697	171,574	189,697	171,574
受注損失引当金	2,500	—	2,500	—

## (2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

## (3) 【その他】

該当事項はありません。

## 第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで											
定時株主総会	6月中											
基準日	3月31日											
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日											
1単元の株式数	100株											
単元未満株式の買取り												
取扱場所	東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社証券代行部											
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社											
取次所	—											
買取手数料	無料											
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告ができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL <a href="http://www.xcat.co.jp/ir-info/electronicnotification/">http://www.xcat.co.jp/ir-info/electronicnotification/</a>											
株主に対する特典	9月末現在の株主を対象に保有株数に応じてクオカードを贈呈しております。 <table border="1" data-bbox="501 1144 1366 1346"> <thead> <tr> <th>所有株式数</th> <th>配布内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1単元（100株）以上5単元（500株）未満</td> <td>500円相当クオカード</td> </tr> <tr> <td>5単元（500株）以上10単元（1,000株）未満</td> <td>1,000円相当クオカード</td> </tr> <tr> <td>10単元（1,000株）以上20単元（2,000株）未満</td> <td>2,000円相当クオカード</td> </tr> <tr> <td>20単元（2,000株）以上</td> <td>3,000円相当クオカード</td> </tr> </tbody> </table>		所有株式数	配布内容	1単元（100株）以上5単元（500株）未満	500円相当クオカード	5単元（500株）以上10単元（1,000株）未満	1,000円相当クオカード	10単元（1,000株）以上20単元（2,000株）未満	2,000円相当クオカード	20単元（2,000株）以上	3,000円相当クオカード
所有株式数	配布内容											
1単元（100株）以上5単元（500株）未満	500円相当クオカード											
5単元（500株）以上10単元（1,000株）未満	1,000円相当クオカード											
10単元（1,000株）以上20単元（2,000株）未満	2,000円相当クオカード											
20単元（2,000株）以上	3,000円相当クオカード											

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、会社法第166条第1項の規定による請求をする権利並びに株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利以外の権利を有していません。

## 第7 【提出会社の参考情報】

### 1 【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

### 2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出しております。

#### (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第45期(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日) 2018年6月27日関東財務局長に提出。

#### (2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年6月27日関東財務局長に提出。

#### (3) 四半期報告書及び確認書

第46期第1四半期(自 2018年4月1日 至 2018年6月30日) 2018年8月10日関東財務局長に提出。

第46期第2四半期(自 2018年7月1日 至 2018年9月30日) 2018年11月12日関東財務局長に提出。

第46期第3四半期(自 2018年10月1日 至 2018年12月31日) 2019年2月12日関東財務局長に提出。

#### (4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく臨時報告書

2018年6月28日関東財務局長に提出。

#### (5) 自己株券買付状況報告書

2019年6月4日関東財務局長に提出。

## 第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

# 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月26日

株式会社 クロスキャット  
取締役会 御中

## 有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 板谷宏之 ㊞

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 森田浩之 ㊞

### <財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社クロスキャットの2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

### 連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

### 監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社クロスキャット及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### <内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社クロスキャットの2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

#### 内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、株式会社クロスキャットが2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

---

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が連結財務諸表に添付する形で別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

# 独立監査人の監査報告書

2019年6月26日

株式会社 クロスキャット  
取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 板谷宏之 ㊞

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 森田浩之 ㊞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社クロスキャットの2018年4月1日から2019年3月31日までの第46期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

## 財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

## 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

## 監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社クロスキャットの2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

## 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が財務諸表に添付する形で別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

**【表紙】**

**【提出書類】** 内部統制報告書

**【根拠条文】** 金融商品取引法第24条の4の4第1項

**【提出先】** 関東財務局長

**【提出日】** 2019年6月26日

**【会社名】** 株式会社クロスキャット

**【英訳名】** CROSS CAT CO., LTD.

**【代表者の役職氏名】** 代表取締役社長 井上 貴功

**【最高財務責任者の役職氏名】** 該当事項はありません。

**【本店の所在の場所】** 東京都港区港南一丁目2番70号

**【縦覧に供する場所】** 株式会社東京証券取引所  
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

## 1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長井上貴功は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。

このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

## 2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2019年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制(全社的な内部統制)の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。

当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、会社及び連結子会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定しました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、会社及び連結子会社1社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しました。

業務プロセスに係る内部統制の評価の範囲については、各事業拠点の前連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）を合算した売上高の概ね2/3を一定割合として金額的及び質的影響の重要性の観点から、「重要な事業拠点」を選定しました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金及び棚卸資産に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しています。

## 3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断しました。

## 4 【付記事項】

該当事項はありません。

## 5 【特記事項】

該当事項はありません。

**【表紙】**

<b>【提出書類】</b>	確認書
<b>【根拠条文】</b>	金融商品取引法第24条の4の2第1項
<b>【提出先】</b>	関東財務局長
<b>【提出日】</b>	2019年6月26日
<b>【会社名】</b>	株式会社クロスキャット
<b>【英訳名】</b>	CROSS CAT CO., LTD.
<b>【代表者の役職氏名】</b>	代表取締役社長 井上 貴功
<b>【最高財務責任者の役職氏名】</b>	該当事項はありません。
<b>【本店の所在の場所】</b>	東京都港区港南一丁目2番70号
<b>【縦覧に供する場所】</b>	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長井上貴功は、当社の第46期(自2018年4月1日 至2019年3月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。